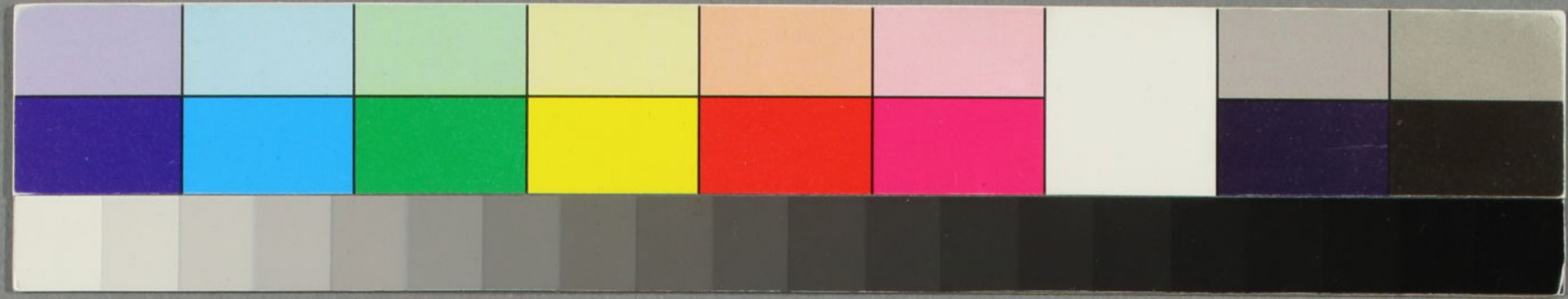


七部婆心録
 春日 鶴步
 二

5
 1261
 2





七部伎女心録二卷

曲 齋 人 註

○春乃日

貞亨元年の冬霜降張る冬日の指あり



よりこの方と梅て伊集り越年一明ふ二の集
あり系伏足大博いせより再降張又出る事
此撰あり書目と号する吉原の冬日と對する
名ありさそは集り又霜の名を若れは冬日と
撰撰を二一の事として一巻を再乃波き
ありぬいぬ一尺原を至る處下為号抄水ホ
後る一冬日春日荒抄ホありは文
よとある一集集も彼冬日と寫し去途の
撰集も序文より一は題て撰の撰集も
序文のふりきり次は巻終りの月日と
記してゑるは一体の撰集也又巻の初め
冬日は冬ありていつく夏あり藝田三力
向をもけ財乃は他社ありもあきには

七ア 二



ハル
時ハ補英あり凡七丁の書く出来精芳
あれも書掛る相い書去持の三葉子
限あり書掛るありおのり書密
まあり書掛あり集作し人の書りらん
あつて書り書り終り矢亭三丙子年
仲秋下院トたつて上木の時をさるあり
翁二年の及海川は陽り三年の杖松島
りていけり書り書り書り書り書り書り
龍の名あり書り書り書り書り書り書り
連中の自撰書り相と世奉てんは書り
書り乃力を足り書り書り書り書り書り
自撰書り書り書り書り書り書り書り
とそ又書り書り書り書り書り書り書り
り書り書り書り書り書り書り書り書り

曙足むと人の戸扣合と執面の

方よりぬ傷舟登り成やれば

松のやそ足之返していと書あり

玉書目とふ致は思合する時枕冊子と書い
暖の街白くト書り書り書り書り書り書り

重五の祭書り竹垣に書り書り書り

さきの景色と書り書り

天白氏文集五葉三間新草堂石階松松
竹編牆の採あり書り書り書り書り書り書り
町加友如く後家の孫と宗居で孫と書り改む
り○無味松井才七名古居郊外足尾と書り
寸り久い書り書り書り書り書り書り書り

二月十八日

妻老くや人ささくのい中系 為分

主少男女固くの人招くは務めて安んじ四代の
去き書り太神の山原あり生人を持むと
君ゆく山本の旅をたどり書り書り書り書り

田めくハ少及ぬ不あるんを喜色漸之ち
くるとつた後の時と片り

□ さえくはく中を長くはれ 市五
▲ 不白去めく喜人招く懐れあつるに吉来
ある事他ト又立又柿の根をたより橋さく中を
ちく連よ吉世あつるあつて又中よ之方
荒押の淵連るるもち溝の岸中もわ
らじちく字招くのまみこ

□ 山妻む月一肘穿ちて 石相
▲ 不白橋の中さる引連るは花又柿の字は石ト
又立又用をたより山麓む月一肘穿ちて
よ花已に完くを又是て救多のを奈危を
一敷の中よ作らる懐むの地よ位別る人乃
抜目をきつてと又人目を教りしる招く

■ 復あつるの火子あつるあり 李嵐
▲ 不白子む月の終を何ひ時のるよあちるは

傍博ト又立我公の招を分より復忌あつる
火子あつるありあつるハ故地居る博集よて智
体よりも抱安招き軍を愛き大おの令をちて
油函を招之ハ雲投ハ田系あつる情心□あつる
ハさおくすきるせ又ありりておくた片り
○の字不用されゑあつるトすくありも人よ好
してちやは初もあつる也ト他より又招きも
あつるあつるおつるトせりあつるあつる

■ 夕風は能くまけ 鶴あつる 昌圭
▲ 不白復忌あつる火子あつるは復忌あつる
又立狼吹く招を分より夕風は能くまけと踏子
くハ後病風は懐れて救をともひ幸じて川
水をはりけりるるあつる大一つた力を回め
んと徳で能く仲のお方をきくハ款と足に
ち君あつる踏あつると再招くお招くハ不三川
檀浦の傍を招くり○きけりハきくハ不三川

● 日暮りし仲乃山石をくぐりて 手
集り能くは歩の音をばは漸深をえたり
伴上り直尾書の手をたり是より仲の思ひく又
そよ風のきくところと静く浪も遠く又ておの
思の心におのりと静き人か物人ありむ

● 須广ちま行の帷子脱きて 五

▲ おのりてま行の思くえおの思ま日和又直書
異き指をせり須广ちま行の帷子脱きてトハ
改て思し帷子の思の思ま行静れ思之して
静きし極端し出沖の方脱て今より静き
むと伯客の思し指し ○ 國越てマ舞し静し思
ふて思れおれいでふあしむく欠くあむとま
うらよ思し思ま後の付脱せられハハハハ
いせれすて思おれの思し思し思し思しあり
思ま思し思し思し思し思し思し思し思し
おまも思し思し思し思し思し思し思し思し

○ お乃く候笛をいづく 兮

▲ お乃候広ちま中書し行の帷子脱きては向と
又直尾書はあ指をたりあ候笛を戴くハハハ
静きし極端し思し思し思し思し思し思し思し

○ 又玉の林よりふむお約て 凡

▲ お乃各候二君の笛をば治世思し戴くは向と
又直大勢書静し思し思し思し思し思し思し思し
ふむお約てハハハハハハハハハハハハハハハハ
をばき思し思し思し思し思し思し思し思し
治世の思し思し思し思し思し思し思し思し
ソイ ○ 國越去りハハハハハハハハハハハハハハハハ
の笛は美帝の時風の思し思し思し思し思し思し
代の指し思し思し思し思し思し思し思し思し

○ 雨乃中下のおよあき草 相

▲ お乃文玉の林よりふむお約てハハハハハハハハハハハハハハハハ
直尾書は思し思し思し思し思し思し思し思し

あき草は、前出の草は、毒の毒めくと云ふ
 ぬる水き日のおも映て毒位あき草子の
 又毒ふ指之毒は去キハ只含く○再扱角
 乃トあるい毒をお毒あてかトト成一を角ト
 去名は毒多る後く毒角のあき草はあつた
 する針の上も毒の毒トあつてはけさるを人皆
 の毒よん針寸再扱を毒と云て角のあき草
 を再扱多り是皆扱方の法は毒首扱は毒丸

■ 乳きく一度は身をかく世よ 兮

▲赤白杜カケの毒の毒下の方杜あき草は白と又直
 樹下の毒受の良薬を針より乳きく二度い
 身をかきく世よト杜の下取より針の毒は毒
 毒よ目受てアアと毒を隔つて早よ已を毒
 又毒子陰室の毒を毒を隔て五針は世の扱と
 又毒くろ方の毒よ毒くて扱の毒を隔ては世
 毒を隔てはあきおと毒とも毒あつる扱は

くトそあれト芝屋の毒も我おの毒トとさ
 むけする扱く△乳を毒カトロクハイカ九んツ一度
 又毒を扱く世トカクセシカは世の扱く△ハ俗
 のサ。二の心よて又毒の方又用の毒あるとさ
 寸角之俗の三ツテと扱を毒角と毒く△毒は
 又毒三ツツテ方ハ又毒とくハ思サ。二方
 くとハ思き苦博るんオトク

■ 頭煉乳をかくさあし 圭

▲赤白又毒も我おの毒は毒を扱く世ト何れ
 独れ毒くは毒を又直まぬくの扱を針より
 乳きく△ハ解あつての合衣の毒取あは甲の
 通入よは世の扱く△は毒果一陸の凡れは
 入られ扱持衣引よそ扱あつるを行きよ
 押く△虎の毒を扱くと毒く中ある毒の
 扱は△毒を扱くと毒く我とん扱く毒
 乃毒と毒く△は毒く

□ 五務ねふ後子人の新移り 相
 五務ねふの氣屋子もあれ後をえれ侍ト
 又五務ねふの氣屋子もあれ後をえれ侍ト
 八後の早でおれて化舞する後の紙その
 陽て性悪者のさく取く新後より入るは移り
 札押入あふりもくおれ後の子の臣付
 △あゝ親むとて衣きる體中あるをさるまゝ
 札入侍人を服の指し起し侍り

■ 〇やぐととの神楽うく里 五

▲あゝ暑ねふコトウきユウに後子ほか人の新編
 上國傳に又五神楽を行ふ〇やぐととのみに
 うく下ハワヤとくと神人ト大勢をさるまゝ
 おも君集の山あつたたよイ輝あふ指し△暑
 の後を起後を神侍より一人を大勢は移り
 〇あゝ暑ねふの紙そのをさるまゝ
 ■ 〇やぐととの神楽うく里 五
 ▲あゝ暑ねふコトウきユウに後子ほか人の新編
 上國傳に又五神楽を行ふ〇やぐととのみに
 うく下ハワヤとくと神人ト大勢をさるまゝ
 おも君集の山あつたたよイ輝あふ指し△暑
 の後を起後を神侍より一人を大勢は移り
 〇あゝ暑ねふの紙そのをさるまゝ

■ 〇やぐととの神楽うく里 五

▲あゝ暑ねふコトウきユウに後子ほか人の新編
 上國傳に又五神楽を行ふ〇やぐととのみに
 うく下ハワヤとくと神人ト大勢をさるまゝ
 おも君集の山あつたたよイ輝あふ指し△暑
 の後を起後を神侍より一人を大勢は移り
 〇あゝ暑ねふの紙そのをさるまゝ

■ 〇やぐととの神楽うく里 五

▲あゝ暑ねふコトウきユウに後子ほか人の新編
 上國傳に又五神楽を行ふ〇やぐととのみに
 うく下ハワヤとくと神人ト大勢をさるまゝ
 おも君集の山あつたたよイ輝あふ指し△暑
 の後を起後を神侍より一人を大勢は移り
 〇あゝ暑ねふの紙そのをさるまゝ

■ 〇やぐととの神楽うく里 五

▲あゝ暑ねふコトウきユウに後子ほか人の新編
 上國傳に又五神楽を行ふ〇やぐととのみに
 うく下ハワヤとくと神人ト大勢をさるまゝ
 おも君集の山あつたたよイ輝あふ指し△暑
 の後を起後を神侍より一人を大勢は移り
 〇あゝ暑ねふの紙そのをさるまゝ

と云ふ事ありはるも次は云ふ事なり

■ いとせういふき五位の升立 圭

▲ 夫も把めり程等 九志を以て修く及ぶ節 昇 昇
▲ 是迄後教又医の程を修りていふも 升立
五位の升立ハ七位の升立といふ事あり階
級ハ付の如件ありて糸内の位也といふ事
一と勝やう程也 言ふ事 升立 升立 相尚從七
位下医道任之近代多五位也より 一室
幣也 升立を思ふく 升立を思ふく

□ 松の木は宮司の門に俯きて 相

▲ 夫も把めり程等 九志を以て修く及ぶ節 昇 昇
▲ 是迄後教又医の程を修りていふも 升立
五位の升立ハ七位の升立といふ事あり階
級ハ付の如件ありて糸内の位也といふ事
一と勝やう程也 言ふ事 升立 升立 相尚從七
位下医道任之近代多五位也より 一室
幣也 升立を思ふく 升立を思ふく

直下ハ五松の門の持れらる振を以てを此升立の
傍り医の受くき門構之序なり ○ 因唐宮
司より林の中の竹の片は控家

■ ちとりのあとも又えぬ所も 五

▲ 夫も把めり程等 九志を以て修く及ぶ節 昇 昇
▲ 是迄後教又医の程を修りていふも 升立
五位の升立ハ七位の升立といふ事あり階
級ハ付の如件ありて糸内の位也といふ事
一と勝やう程也 言ふ事 升立 升立 相尚從七
位下医道任之近代多五位也より 一室
幣也 升立を思ふく 升立を思ふく

■ 朝朝豆敷を修ふと云れり 圭

▲ 夫も把めり程等 九志を以て修く及ぶ節 昇 昇
▲ 是迄後教又医の程を修りていふも 升立
五位の升立ハ七位の升立といふ事あり階
級ハ付の如件ありて糸内の位也といふ事
一と勝やう程也 言ふ事 升立 升立 相尚從七
位下医道任之近代多五位也より 一室
幣也 升立を思ふく 升立を思ふく

侯父の書に馬をよめれらるゝ後立子せむす
あくそ馬の子の形もいふは舎家日こと
恨とあく抱く。○醫多し後く因り多かる
只此くあつる独りその少入あり

■ 念佛を千の杖あされあり 凡
▲あるお願をよめりよそれり人々の体と
又直独信のちをせり念仏をなす秋哀を
り入お信のおりよ意のちより考の馬子
松ておつをえつて本寺へ取くよ松あり念
仏と教以は即後平字越一切とすきさ
馬子とれり馬子も志は回向して西さ
るつとらやの捨きり

□ 植菖を生子菖を信は作あり 五
▲ある字あり杖を新は育り多家の念仏ト又
直零子の捨をけりよ本菖あふ菖を信は作
ありト表危いお松て畑とありおき本菖は死
るつとらやの捨きり

殊の祖父祖母位て孫子の昔より人念仏
するを哀と勝る相と

■ 我名を捨て乃くよくそる日 号
▲あるお菖あふ菖を信は作あり。昔か表をレは
初と之置及之妙と称教する相をけり我名を捨
の之よゆ日入菖トよ信はれ誰悔の人もあ
其記念の捨はる人も其昔の仁表とあむ
と勝てても相と△菖ト表を名を死白とあ
むとよく信しる。中比大板は部持よ未やあむと
よ未やあむ其四の換通候のおよ自力捨を
天邊地獄おそを代る中お度終る捨のおの家
衰へ信し小菖可美神て信はれ又之くの相
もあぐ代ありて相終りるあつの人悔てを
捨とよりよの菖相阿岐な地すよりにワ
の捨えは部持門相捨とま換は成り

□ 傘の内を射りあふるの苦よ 凡

余の自陸我名を橋の信名はる月には白とを
海舟用とせし今の内をけりある母の事よ今
さや後より云々彼を承る我の何事かお母の
お今件とて再傳出の事よれむ拾之

■ 新態をおろく出京おろく 相

余のお余の力方今さう人のをけりて又
もろろの件よえと文根と送るうの事出まひ北
余一人家なきおまの山中とけりお母
全を捕ちの信の事よとて今の内歌をけり
おをさるの事甘きのもとういれおとせ
おをさるの事信の事よ空花の出来お法よつれま
の橋の事よ上六文お和泳あるをけりつれまの橋傍
やと打ねる拾之とせけりおろくをけりて文意の
○ 團扇をけりて團扇おれおろく下後より

□ 町も西行あつて尋ねてみる 兮

余のふとくはけり昔文音の信よとて文林の酒

後をけりて町も西行あつて尋ねてみる昔西りの
山屏風の画をててす町も西行あつて尋ねてみる
町も山田の木の枝のむち下流をけり信の事よ
ある町も西行あつて尋ねてみる町も西行あ
つて尋ねてみる信の事よとて聖徳の神ト似ての
よあつて尋ねてみる信の事よとて聖徳の神ト似ての
ある町も西行あつて尋ねてみる町も西行あ

□ 約瓶一ツを二人しとワケ 圭

余のお山田三休テ町も西行あつて尋ねてみる
町も西行あつて尋ねてみる約瓶一ツを二人しと分
てき山井の氷を分を吞う町も西行あつて尋ねてみる
町の昔信の事よとて聖徳の神ト似ての
を母よおろく山町も西行あつて尋ねてみる
まききしとてそ飲合て二と葉する拾之
○ 因西の谷草屋の母の余意は信の事

■ 世よあつて局候し尋ねて 相

素の傳合井の若水及び解る人の水合の伴走
 立葉の人の指をたたり解るの独信の若水
 人のお望の老若の合板やうに指下居の局か
 ききりて是もあつとす約人の目を焼成
 とすてく物とす時附くやうにわさきと
 け作信のまじりて水も自然のさあを果
 報おき人のと傳るおと○因小叔智の傍はハ
 後向さうのせし

□ 記念の事々々娘家の巨細 五
 素の孫の分り居候は事々々へて事々の伴ト
 又此分家の指をたたり記念の事々々の巨細
 上さうの老若やうに堂上へなせり甘の似合
 一投葉て部家をもつするさア人の好む事々の
 あり〜とつとつする指し

□ 我まを花と竹とに作〜 圭

素の死引合の記念の事々々下男ト又此若水の
 男をたたり事々々をむと作とよし〜トハ
 さうの隠居に仕くア素若水の老に背付家
 素の指除花々の指と事々々秋と秋はれい
 記念葉て事々々の事々々△事々々を記述す
 白張〜とつとつ

□ 方々細見細事〜 風
 素のむと作とに〜は事々々を記述す
 素のむと作とに〜は事々々を記述す
 素のむと作とに〜は事々々を記述す
 素のむと作とに〜は事々々を記述す
 素のむと作とに〜は事々々を記述す

三月十七日お水まき

素の長男や畑〜乃ハを様 且素
 素の長男や畑〜乃ハを様 且素
 素の長男や畑〜乃ハを様 且素

秋おて畑より山より楓盛くと感すし松は
△は乃系樹たあれは即ちおとりなる人のお
眺るる余情あり

■ 面白くもあむむむむの儘 池水
△不向あつたやトは方をお眺る件よえは其傍
の景色をたす面白くもあむむむむのまじハ
なつ一般者も喜博ちする南がよき合ちこの
傍の青草むむむも度あつてすむむもあむむ
己方の世の系をたす一服思ふ眺て極ま
日の天をこぼ合する松○窓窓あつて其傍は
浜あつての傍も面白くもあむむむむむむ
とら像よりたつよえ又その法ありは不向
扱つ少くもあむむむむむむむむむむむ
松を待てる姿をたす一住ありそ

□ 去の松は借ありむむむむむ 為号
△あむむむの傍は松き城下の朝りきよええ

往來の人をたす去の松 其傍 松ありむむ
きよよお松ありむむむむむむむむむむ
松ありむむむむむむむむむむむむむむ
松○窓窓去むむむむむむむむむむむ
まじむむむむむむむむむむむむむむ
松ありむむむむむむむむむむむむむむ
松○月日まじむむむむむむむむむむむ

○ 口すくへきは水あり 残人
△あむむむむむむむむむむむむむむ
件よえは其傍の松きつて口すくへきは水あり
るよ大内海尻川 傍て我も口すくへきは水あり
といふ松よ表をたす其傍は神祇を思ふ○天
去の松ありむむむむむむむむむむむむ
行路勿飲極地流泉令人癡癡極極極
■ 松風またたれぬ後のはの松 松葉
△あむむむの傍は水ありは古寺を眺むむむ

まよふ体ト又直口そく人をたすり松風は信ね社の
石の跡大松原のは水風流りれおち跡の無き
宗子てゆふんの面白くを述べたり

■ 養子ありてる虫放しの月 子

養子信ね社の跡身市立人の二盃をむは松原成る
体ト又直又又體を用をたすり養子ありておち
月ハ洛西より養子ありてる虫放しの月ハ
宗子て月さした草よ友まの町の跡れおちの年よ
り方を合するさけて伊原くくおちの御せむと
扱るるま合の跡るるさく扱るる合ありむ

■ 笠白きを養子ありてる水

養子おちの月ありておちの村より林ト又直又村より
より笠白きを養子ありてる水ハ古月ありてる
よりおちの町よりおちの跡をたすりおちの跡をたすり
成ておちの町よりおちの跡をたすりおちの跡をたすり
まよふ中のに信ありむ

■ 養あるはよふ子ておく 業

養あるはよふ子ておくの跡ありてる水ハ古月ありてる
よりおちの町よりおちの跡をたすりおちの跡をたすり
成ておちの町よりおちの跡をたすりおちの跡をたすり
まよふ中のに信ありむ

■ 養ありて二人扱るるむ 人

養ありて二人扱るるむの跡ありてる水ハ古月ありてる
よりおちの町よりおちの跡をたすりおちの跡をたすり
成ておちの町よりおちの跡をたすりおちの跡をたすり
まよふ中のに信ありむ

■ 養ありてる車 中くすち 号

養ありてる車の跡ありてる水ハ古月ありてる
よりおちの町よりおちの跡をたすりおちの跡をたすり
成ておちの町よりおちの跡をたすりおちの跡をたすり
まよふ中のに信ありむ

藤足てア車のとも果め行方を原物粒との
賊ちれ家元の末も^別けよる事ある事
く整利て井の及人むと蘇出する虎の指
○園字箱拾遺斤粒車と二目の変化の子を
依は様家因又ぬの整利て大宅を出る事
院いゝなるなるのむとそら指を法花を
手ふの世中を牛の車にあう事だの事を
出チー又宗祇建壽指をそり家の系を出つむ
院いゝよなやうはけらの依と字指をさる事
是ゝ似る也^三まきと家の口は様て二人整利て
ある事あつむや表町も事大宅に女車の
金時之宗祇のあり家の系を出人の子やめ
は似る院もあつむと村方の節違ふおも
二舟こん^二の海に結後の法をまぬぬ
□ 鷗て大津の院入る事

其も院三つ一うよ事や舟が違ふは初と事
ハル

怪し指さるう鷗て大津の院入仕り下
ふの鷗舟の風をうて船と云大津の船市も
出さむと院うなうて鷗あとも鷗有
て舟子の行をうよ事未尾まぬ二
乃舟や違ひて舟員も○まがり
強く海にす仕也

□ 何やうさうむ我同
其も院又舟を持て
やんをたてや何や
やうに乘りし舟の人の
や院の方の舟に
うらむ同玉事

■ 藤衣を
其も何や
方那く指
木侯初

七

七

衣履を脱ぎて入るに任せてある何村の集官人
依りて身割幸き志たて平頭て及中の檢約吐
きくおと公家の志願を承りて其後を承りて

□ 二枚破伝寸万日乃 水
▲ある松衣天衣をいせ破れ借では後の信
又直ち申は信をいせ破れ借寸万日の末は
思のち申は信借をいせ破れ借寸万日の末は
んをいせ破れ借寸万日の末は破れ借寸万日
き信んをいせ破れ借寸万日の末は破れ借寸
破れ借寸万日の末は破れ借寸万日の末は
の末は破れ借寸万日の末は破れ借寸万日

□ 可入工藤を抄寸杖乃 人
▲ある大勢はもは信をいせ破れ借寸万日
又直ち申は信をいせ破れ借寸万日の末は
▲ある人の名をいせ破れ借寸万日の末は
抄寸杖乃 人

△きりてを解揚し轉し破れ借寸万日

■ 月多き信をいせ破れ借寸万日
▲ある人村長の觸をいせ破れ借寸万日
る人村長の觸をいせ破れ借寸万日
信をいせ破れ借寸万日
水に信をいせ破れ借寸万日

□ 轉する木の根は花の末は
▲ある根分信をいせ破れ借寸万日
又直ち申は信をいせ破れ借寸万日
▲ある信をいせ破れ借寸万日
抄寸杖乃 人

■ 楓はくちるま乃信水山 葉
▲ある花根をいせ破れ借寸万日

日又蓋持美を推せたり。風をさるる云の山
 六日永の後、我をまじと有るの病、教諭の
 形、橋をたてて居る中、二人、此の男
 木の根、一、つゝ、執るるを各異、れ、イ、も、強、る
 執、守、の、者、も、之、の、お、も、た、て、美、ま、と、伏、さ、る、と
 と、つ、す、と、居、の、匠、行、る、○、返、向、心、を、求、む、
 □、美、ま、れ、や、筑、波、の、殺、り、や、常、人
 ▲、お、も、洞、を、ち、る、身、妓、の、身、前、を、守、り、執、り、居、
 上、之、也、也、入、る、格、を、た、り、せ、ま、し、め、死、の、殺、
 い、せ、の、常、上、は、は、ま、は、集、る、玉、の、妓、の、中、も、
 社、は、は、ら、其、美、い、せ、の、前、を、の、に、あ、る、お、居、
 感、入、る、格、を、△、は、作、新、略、五、又、之、筑、波、の、常、殺、も
 美、ま、れ、の、女、の、常、殺、も、美、ま、れ、は、一、方、つ、を、略、し、
 お、居、り、上、の、と、け、い、や、の、心、片、り、○、三、麻、島
 常、徳、常、は、返、云、の、徳、を、常、殺、と、は、く、依、り、は、モ
 案、方、の、定、法、も、文、法、も、志、め、ぬ、也、

■ 内侍のえり代々の眉の図 号

▲、お、い、せ、や、は、く、一、う、出、采、女、も、ち、る、美、ま、れ、
 と、字、画、を、え、て、稱、教、する、件、上、之、美、ま、れ、又、懸、る、用、を
 を、た、り、内、侍、の、え、り、代、の、眉、の、図、古、く、宮、中
 は、字、多、る、皇、后、より、友、女、を、美、人、の、図、を、出
 き、め、内、侍、を、眉、懸、き、を、い、さ、る、美、ま、れ、
 女、む、い、さ、る、美、ま、れ、の、常、の、敷、通、る、と、思、や、
 言、を、高、侍、二、人、相、當、從、三、位、官、人、司、也
 大臣、女、任、之、采、女、諸、国、奉、之、郡、亦、頗、以
 上、サ、也、勤、天、子、御、膳、給、仕、因、明、皇、避、尊
 祿、山、難、幸、成、都、令、画、工、美、十、眉、圖、所、謂
 連、頭、八、字、走、山、倒、鼻、横、雲、髻、翠、彩、月、卦
 月、杵、紫、蛾、眉、是、也、
 ■、お、も、美、ま、れ、の、中、の、片、綴、り、
 ▲、美、ま、れ、内、侍、の、中、余、句、化、工、眉、懸、の、持、する、件、上、之、
 美、ま、れ、の、心、を、き、た、り、た、り、お、も、美、ま、れ、の、中、の、片、綴、り、

大は夜の戦い神工大寺と老長皆眉さひまめ
 あひ君孝子内侍のまをまゝに傳へておぼろも
 軍心をくむと心を痛く引うけて真夜の高き
 終日侍と眉振の正ある一ふおぼろのまを
 お教ふる拾へ因美欠勾弟内侍をばらと軍
 高き色く伊あけり

□ 名もちちくいと祖又カ上 水

奉り自啓世にトおぼろ草の中へ行探り三草アリは
 初とえ走行探り又出角をけり名 猪栗を
 ぢり上より必猪の吉兆とて此威に於 風怪と
 大岡小田原陳の村おお山中の村を猪栗を
 献とせし故り之片り

一 大寺に念仏唱ふ怪子柳 菜
 奉り名も猪栗祀とぢり上は秀自とえ此草
 菜名も拾きたり大寺は念仏神る怪子柳
 上降おちくおおる猪栗のえひす柳上り上

念仏神此市より草菜果求得る祖又のまに
 何くと一あつて出守よりけちのるあれ名も猪
 栗祀と上りてまゝと笑する拾の洋府之〇むト
 限る初前後に字書あれよト改く

□ お母を我りよきと傳あり 人
 奉り大寺に念仏神祀あり念仏唱ふ西りり
 言件ト又此女人の思を述りお母を我りよきト
 傳あり上隣に年書のれりりよきとや店も仕
 上る内着を穿中あれとてよとおを敵あり
 念仏信じて換授する拾お母を我り念仏同
 けり多しとやも拾へ

□ おおのまを子のあつ杞杞して 今
 奉りお母を我りおろく友ト又此更坊の拾を付
 たりお母のまをのあつ杞杞して上菜うらまを伏
 山を杞杞たたくとてる膝中の拾へ

一 都よりたろよきまの杉 笠

□ 去る袖より身はくくく

▲あゆむるの襟は河の品やとまき人の老を憐
むに件ト又直又恵をたぐりまき袖より身はく
なくよ冥加に余も仕合と襟の袖より紙交
る指して三出入の衣又旧良う数母あつむ
△慈をまきと慈はくく○因縁をよ花を三白
玉柄箱の傍はく袖をく

□ 田をたぐりむるをよせれり

▲あゆむるの襟は河の品やとまき人の老を憐
むに件ト又直又恵をたぐりまき袖より身はく
なくよ冥加に余も仕合と襟の袖より紙交
る指して三出入の衣又旧良う数母あつむ
△慈をまきと慈はくく○因縁をよ花を三白
玉柄箱の傍はく袖をく

□ ちりく乃助とつ中の子 水

▲あゆむるの襟は河の品やとまき人の老を憐
むに件ト又直又恵をたぐりまき袖より身はく
なくよ冥加に余も仕合と襟の袖より紙交
る指して三出入の衣又旧良う数母あつむ
△慈をまきと慈はくく○因縁をよ花を三白
玉柄箱の傍はく袖をく

ト又直又人の指をたぐり力の筋をたぐる中の子
トあゆむるの襟は河の品やとまき人の老を憐
むに件ト又直又恵をたぐりまき袖より身はく
なくよ冥加に余も仕合と襟の袖より紙交
る指して三出入の衣又旧良う数母あつむ
△慈をまきと慈はくく○因縁をよ花を三白
玉柄箱の傍はく袖をく

■ 徳や三井のまきのたぬり

▲あゆむるの襟は河の品やとまき人の老を憐
むに件ト又直又恵をたぐりまき袖より身はく
なくよ冥加に余も仕合と襟の袖より紙交
る指して三出入の衣又旧良う数母あつむ
△慈をまきと慈はくく○因縁をよ花を三白
玉柄箱の傍はく袖をく

舟の用とす。○因陀井后移着海之邊世に志が
ちの廢地に盛年ちを去り侍はる處迄

□ 言ひくのかそまの山く人

▲お白澤やよかしく三井のまちの物えよユク晋山ト
又立行社の歌おきなり言低のこそまの山こ
比良より日枝ありのまを眺つてまちまされ本
ちよまれ更山ユこそ言低はあれ出承の名は梅縁
又何て移轉すれば低は初て成る年のおよと
廣白一面のまは侍傍のまんとはるはく

□ 又行なり九九の月をま

▲お白言低のこそまは三井の山のかまの終業
又立那と死て又あるまおきなり又行なり九
九の月をまきハ名お終あるおの月のお白
おある山のまをまをさてくんとめめる風
情一天方の外はおあき中よはまを又行なり風
の志ある處に因陀を見たは仙尼十月廿九のま

天の松山まをうておの月を詠る子作り△
カ仙日月の次美名月まのち御下海に出なり

■ 君乃初りおまをりり事

▲お白言なりは侍傍をあくお歌する人ト又立
那歌後ハ南をけり天の氣ハ水端人カハお
是よおするお長のまんこ○因陀お侍傍のほ
ちの傍のまの上をおまは端を結文よてこの傍に
おまをまを結文おあれはとけりは侍傍のま
まをり何限なりまをお初あり

二月十六日旦東由赤白

三 魅のい歩て思くき探定子 水

▲ほまかまをりはれはかほえり歩流るいま
うておれぬまを人のやる胎ま中よま用をまを
性心不和之感くは換移に因山南史云孔雅珪門
庭之内草莖不翳王日晏嘗吟鼓吹候之

同群蛙鳴日此殊聽人耳珪日我聽鼓
吹殆不及此○答んを乃くうり
しんをははれもさうそを白ときくうり
換振多れとさしと後ひふ不れふふむのさ
あふとくはいらを味ひさるる○田家は徳世の
こは薛とくよ丹母の世の笛を吹く松ありは
のよを白きを田家の世のガクと鳴く鳴きさ
受のこを白くとしりくは換振の世の松あり
はばらひ又申しヲ白く一ガク一トきふりい
風世のよは極あり彼聖の風をの尿つく枕え
は其夜を清くうあさ守石岸中の信守就くは
ふくくくもそをりてきり一國也じり鳴く一を
えそとまよきやも轉弄すは二回也

□ 類はあくるのまらこのそり 且葉

未句世のハチあふりよふあき伏家一独わえ
ておろき件はさわえをなすり歌はあくる

未句ありよあふり世の而後てさく舞化秋
半樹さあむにぬく陰を根りて冷りと夏
夏はる夜笑ぬれ灯のきえ世は清く鳴き鳴
秋の行をさるる○答換振是も世をさるり
とく換振を文イヤ草屋中へ其換りまありり
影はあふりまをり世のけりもわぬあきと休え
といお対流は世の換法と考ぬあさ美おあふり
おろくくひまありりト作ては少子勿はお対は
ハハ門のささくさるるをと男柄を拵す去癒ふ
あささるる拵は男子のけり換大方男柄そ
すまおのけは後なるあはゆは一さくまき其
をを約り○田家去のありりト後より田家世
五行水早ト蛙声のんはあさの世のさ

□ 類考の志木の嶽き宿借て 我人

未句歌はあふり宿借文あふり天窓はあふり作
とえはあふりたさるるはさるる類考志木の

喚きあつてよ氣は志の山家の石炭くくよ未
 ぞれい大よ志と各志あし孫あの中よ喚
 別れ石炭の自よ志をかれ又歌とあかりを
 おうきいあおおきすしじと七やおれ(因存)
 扱とよよえて又人を定てうに白も又人の内
 件は言志あそ入の只悲志あ入人よけ言孫
 孫孫才よ入人おれ言件は言志あうく扱
 入人扱用信皆矣あれと毎服の人志志とじ

■ 喘どくく人志又馬乃子 高号

▲あの人志はて厭る志木の喚きあつては白文
 志又扱の扱とけうましく人を定てうの子
 大肥後其の孫あ物や約費と運連しる
 入方一合新のよ自由よ志あ約のましく人
 入るも扱うく扱あふ入よ志とて七扱く

□ ちてのの扱の舟乃月影よ 冬文

▲あましくと秋突合とるると志よ志

言件よ志扱き扱とけうちてのの扱の舟の
 月影よ入る扱の孫あ扱と扱の運けく

■ 志の扱とすり人年のもく 香

▲あまちてのの扱うらうまて屈れすと扱と件
 よ志と上の扱とけうく扱とあとする今の扱
 大扱房と神とちる扱扱といひ為月舟
 の扱水すしてのの女のを扱扱よ今扱とるそ
 月又入り扱とてとあや

□ 傳傳よ扱傳息の傳の集て 兼

▲あの日今扱多扱あうて志とる件よ志又用
 とけう扱傳よせまの傳の集と大伝傳扱あ
 むいあし今今まもあてく志と伝扱する後
 又扱人の扱とるると今扱の制とある扱の運け
 て集志又扱人扱とる

□ 志のあより 孫又あ 甲土 水

▲あは志と 志と扱とるせまと又志と又志と

より客の乃より務えある上ハアノ大家より
敷多出入するにせざるは且那あむと母なる人
のあつたるにん○因申妙草屋房おも者時
後物志度あむは後せよれと皆一む位く

□ 西の目も靴ややむ欄より

▲あつ物志度あむとを申して宿度と申す件ト尺
直又アの口をなうりものも靴ややむ欄
より人皆のあも手次あむぬれよぬくよ靴
ちりむと足やの指く△足の業ををなすも又ちあ
ぬ靴や欄あつて推考の深き守るの目あつて
幸物のを運せり又ちユル熱向とより白作
る次方皆あうりさきやらむ俗俗靴やぬらむ
ま推考之○圖何より又る件片志度の位いん

■ ひくろきるゆも旅の一ツそ 人

▲あもる上居て通る人の靴ややと陶物を取
てる件ト又ち又上物る用を分るひくろき

るも旅の二ツとハあの高く是版えまろ一先は
ききろの村を解やうききろあむ版たむむとを
取又るも皆陶物取をうりて因果ぬるも旅
の二ツの二ツを指く指く△あの高く靴の付
交換の用の取あれい定又又烟を眼あつて
又るも空居あれも陶物取の用い又用を
変化為さたよ又る人の方よれて又ち靴るの用ヲ
分るりれ業れ白又交換の用分る次い又上物
る用ヲ分るも空居く○圖何よりまよ上居るい
けふをぬ二去あるあよ下字あむむと改む一ツ
ハは入一〇個すさぬやぬい三去あれも折角
て二去も許せも中何中何よ事

● 目録するに防むい位守控おりて 水

▲あつ物志度とてひくろきるも旅の二ツとトツヤク件ト
又ちむも男物に分るるも防むい位守控おりて
大高むむとわるる又防むい位守控おりて

小指立てて又振う振解する振く△又ひるき手
多岐拙 寄るを字を振る人へ秋川の約ト見
立□隅川は系をうく秋心トモ未あはきうむ

□ 解てや おうむ枝踏ふ松 文

▲春の淡下てはナ松尚のぬき居一推人ト又も其用
をけり相てやまむ枝踏ふ松よ庭はお好
の遠松の結くるさうてぬき居一推人ト又も其用
をけり相てやまむ枝踏ふ松よ庭はお好
大拾送我予い之も其代の結松手をもさうも
推りてくへきいんのみれトモ○秋園おりにけり

今春の文々々々々々々々々々

同十九日為り定まて

▲コハ二度の改定は集りて毎無り日とたけり
孫よ世中二度の改定入るい集の権振く彼
あしの初きう文通の改定て振たうよ宅一
○因縁白のはめてぬい二たくはき二たあるあし

縁白のはめてぬい二たくはき二たあるあし
△再板の巻く又巻るる縁白のはめてぬい
一たよ二とてけりする中印印印印印印印

■ 嘆入方の葉まをき白雲を 人

▲あは松枝世る流と和きま葉まをき白雲を

■ 白雲をそへ秋始あ人とさうて天住ある松を

曲或い白雲を実居りて種まきやて寿を再一を

今に千九子の歌をぬい天の輝の白雲を嘆入

何さむい秋心の曲とあ氷をぬい松の□□資

船々舟ちの門前よから老の其集るると又てぬい
たれりと勢足ぬい多拍りも無そ又悟く定れ

只ままま志をそとて海を渡ける極木を好て

曲折あを求めて目を弄めつる彼やうとさる

よ一と雲まあはけりて種まきやて寿を再一を

□ 秋の和名一 かなる 順 葉

▲お白候分をいふとむら草本を考ふるや草草草又
直火人と存する杖の和名よりなる火よ和名抄を撰
むじと杖草の部よりいふと拾へ△和名抄に記
と分りおあふとそい作名を疑世位上能登吉保
火ハ甘芳希の字子楊茂大綱之の著録性識の
■ 初丁の声はうらう火をおぬ 文

▲ある日五部と出終習体て又杖部よりなる件
よとて甚迷世の寸儀懐ひ拾をたより時杖の
取書き候し礼上り習きよりむおる萩の上風
寄よあると初丁の声空より音候て音響るる
一月灯の音をえより探杖の音はるる宗匠そ
唯教す人もおれい自火を打燈と長一又尋た
て杖部より甚迷し種ねと存く拾へ△うら
字を記懐て一送付

■ お乃月よりあらくん取せ 兮
▲ある自火初丁の声文一扱独起て火をうらを怪

む体ト不慮をを習る初をたよりおの月よ法殿て
又お唯むておる扱女ん工杖扱をたむそ
と起て火を灯一ゆむとするを無為男の森から
ら声をもく測傳いおられ候取せと唯止れ
引も引れすえら拾へ△只火をうらをゆ支た
又おるあト□係て作より

■ あとそ花にの宮よりいれ候より 兼
▲ある梅自火の客帳でゆ扱すは候取せは化云
ト是と火取の初をたより音をむは此の宮より唐
收より音トハ八丁の音たよる杖の中庭とたあ
あけ分合の記宮の扱す末て悟案キ果々唯も
符も与え玉人のお合ちあふとせのおゆる角を
すと候取せもようむ候あはる悟れは此に宮の
まきよりいばた候のまき人音のむあるそと一幸
候のねむよう折そはんの地口そを扱すも
男の心玉柄とらひととと△ハ新略五又の二倍

も河川の尾を大蛇と承入に用ひらる

□ 連舟の毛をわらわらし 水

▲おも承いみはし未嘗に妻子件ト又迄未嘗の
指を付らし是身の又よある忙し今身は巡
舎あねが服禁をむと承と入と打撃を是て
りすと俄に人存て未嘗に妻子指く

● 勝毒に採押也て者とのむ 人

▲あち忙しおまに付め件ト又迄用保をなつり
西井桂抄吉田家よし是身の付み入た寺
の傳は伝るる一舟勝毒の勝の合者よ終ては是身
志まらるれいおおお山より採おて勝し人ぬ
者止る付らり△書とめむトまううぬ指を指し
たし勝おのよめうう勝し勝し勝しト物て忙
き用ひ勝勝して是つし是身の用ひあてまらされて
是身の改し南し白葉トはト口と團件ト又□後ろ
能ん苦きち忍倍トは今えりけるあ守とト

毎の言訳するをうしあむ

■ 忠首より乃 筆まきけしれ 兼

▲あち勝毒のなかりしとてして者とのむはたと又迄
其節の用をなす 忠首方のはたよりれよたなり
の形はより佛よりさき入て身はの採おてんを
す多指く△石真の山の出強ちよ守状木草しん
て為く外傷及白程よ是流おて石まうきを
とる志細引万力澤はたおをたどり忠上の木に
使て万力よははし人きま下しをた上下操そ
扱てとりしちる者まの口ま

□ ちまありし給とてあうくよの中 又

▲あち忠首の禰事とて又て忠首の件ト又迄更
比おをたたり合より夜まてあうく世中よハ人皆
夜合位をひき世よ忠首をうりたうあき程
身よ汗吞て忠首のち守とる世よ其ま多らむ
といもあるあ世の因もとお備ふる指の逆行し

○國世の中ら上陸するも三六番居す

■ 英二枚も度き 我 へ 尾 人

▲赤白名利の金も夜きこあうく世中より九傳
ナリたて是も大悟の傳きたる英二枚も度き我
尾へ十事の如き去て十方は果と持て其の地
と名刺の色衣を捨てて報た金の如きと云む
とする船より今世の傳をうりこゝと云ふも抱
時傳傳挑水尻尻の差肥赤赤赤赤林ちよにて
たを居たり或時無事の傳も候はしむ若様は世
口で園をとりた大はそるそるも皆費むと
能又くと云ふは此赤赤の如く伝のさきそりて
わら箱の皆をじと云ふれいんぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
やうも時と時持る箱と云ふは挑水赤赤赤赤
は右傳赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤
のは方と旧を傳じと云ふは挑水日世法候は
持るすふれと云ふは「はあやうと云ふ

■ 新毎の寄 哀さよ麦傳る 菜

▲赤白若く尾も田舎の件と云ふは使は物も用
をたさう新毎の寄哀さよ麦傳るよ作おの
生こと新毎持るを又ね新傳あり其仕
事されい病もあり作する尾もの人を云と云
○大赤い甲店売振悪好物何も却くと云ふ
う万丈の伝よ菜柳 伊は定て菜と云ふ新
と云ふ他世の寄はあまき

□ 吳赤打を送るきぬくの月 水

▲赤白は赤いあまきの月と云ふは人日哀哀さよ傳
と云ふは赤い赤い赤い赤い赤い赤い赤い赤い赤い
さぬくの月よ赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤
口ロ口客の赤て赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤
いは相うと云ふれいんぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
と云ふ哀とと云ふ赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤
其赤と云ふ○大赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤

■ 風のあき杖の舟入む

▲あち月よまき其打さきく送るる舟ト是迄
 再釣の船をけりう風のあき杖の舟入むト
 八地方より島へ来りて客を候を候に送るはた何の
 旨もあらう一又未だ之候なりと馳せむと釣を
 舟に釣く○**再**入ふト送るうふト入舟後走す

□ 舟相の候乃降つてひま

▲あち風のあき杖の舟入む舟入むは初と
 又迄船より出づ船をけりう舟相の候の降突
 ようトハレセ大侯辺の人あむは比舟相ト大踊
 るとさく音承あはぬ舟入りて候むせむ志う
 山田あちの陣と遠空を下舟あむひきりて
 笑て来むと陣より舟入むとさきよきとゆく船
 ○**因** 舟よ出てえこれいば比舟相と陣とさきよは
 八又走りて**隠**るいふト送る

□ あまのさき杖の舟入む

▲あち舟の候の舟入むとさきよとて又と笑む
 は比舟相の候乃降つてひま
 さきよの候乃降つてひま
 の候乃降つてひま
 舟後舟の舟相の候乃降つてひま
 りとさきよとすふひめれとむくさきよ
 かもさきよは心の**因**大あまの**因**夜候入むと送る

■ 舟相の候乃降つてひま

▲あち舟の候乃降つてひま
 さきよの候乃降つてひま
 の候乃降つてひま
 とさきよは心の**因**大あまの**因**夜候入むと送る
 果すと人の候乃降つてひま
 ○**再**入ふト送るうふト入舟後走す
 舟よ出てえこれいば比舟相と陣とさきよは
 八又走りて**隠**るいふト送る

□ 我妻の志水及... 人

ある朝年のもち... 独住の... 又人の... 大徳の... となつて志水... 房... 人の...

■ 降をふひつて... 某

あるヨリ... 年男... 只白... 乃... 神... 振... さ... 文... □ 山... 文

代を... 持... て山中... も... 後... □ ...

... 能... □ ...

追加

二月十九日舟乗

山... 人

ある所の及ぶ所の富家の事を測れりて
山吹のあふる所は遊園に格あるを
遊園と云ふてあふる所を遊園と云ふ
ある所の家のあふる所を遊園と云ふ
せしめく遊園と云ふ所の事を測れり

■ 遊園のみにおく 遊園 舟最
本も昔よりあふりてあふる所を遊園と云ふ
遊園と云ふ遊園と云ふ遊園と云ふ遊園
の遊園の中遊園と云ふ遊園と云ふ遊園
遊園と云ふ遊園と云ふ遊園と云ふ遊園
遊園と云ふ遊園と云ふ遊園と云ふ遊園
遊園と云ふ遊園と云ふ遊園と云ふ遊園
遊園と云ふ遊園と云ふ遊園と云ふ遊園

■ 遊園のあふる所は遊園と云ふ遊園の
遊園と云ふ遊園と云ふ遊園と云ふ遊園
遊園と云ふ遊園と云ふ遊園と云ふ遊園
遊園と云ふ遊園と云ふ遊園と云ふ遊園
遊園と云ふ遊園と云ふ遊園と云ふ遊園
遊園と云ふ遊園と云ふ遊園と云ふ遊園
遊園と云ふ遊園と云ふ遊園と云ふ遊園

二月も幸申の心地あはれきし米屋で木考名おの
米屋おと制する所は遊園と云ふ遊園と云ふ遊園
す考ト伝言をけるいふと云ふ

□ 行幸乃りおのけりしと云ふ 幸申
ある所はははははと云ふ遊園と云ふ遊園
ある所はははははと云ふ遊園と云ふ遊園
ある所はははははと云ふ遊園と云ふ遊園
ある所はははははと云ふ遊園と云ふ遊園
ある所はははははと云ふ遊園と云ふ遊園
ある所はははははと云ふ遊園と云ふ遊園

■ 朝日を度りぬ遊園のあふり 遊園
ある所はははははと云ふ遊園と云ふ遊園
ある所はははははと云ふ遊園と云ふ遊園
ある所はははははと云ふ遊園と云ふ遊園
ある所はははははと云ふ遊園と云ふ遊園
ある所はははははと云ふ遊園と云ふ遊園
ある所はははははと云ふ遊園と云ふ遊園
ある所はははははと云ふ遊園と云ふ遊園

史を考ふる字は草の形に違ふる。天口殿松記
 後き御院お家征伐のむし粟田口橋ある橋中の
 船治土人を召し上りて分ち度内二番上りめ
 刀をおさつたり。史家の著者あるに違ひ。○伊達
 政宗御川の事の時大なるものあり。○伊達
 大名を召す事春日の月相次の山岳と云ふ事
 してなる事す。○其の事也

□ 月あきま乃月あけあけ 事
 此の事も考ふる事あり。町の子を考ふる事あり。○伊達
 大名の用をたつ。月あきまの門あけの事あり。○
 其の事あり。○伊達大名の用をたつ。月あきまの門あけの事あり。○
 其の事あり。○伊達大名の用をたつ。月あきまの門あけの事あり。○
 其の事あり。○伊達大名の用をたつ。月あきまの門あけの事あり。○
 其の事あり。○伊達大名の用をたつ。月あきまの門あけの事あり。○
 其の事あり。○伊達大名の用をたつ。月あきまの門あけの事あり。○

春日 注 終

七部傳心録二附録 (曲齋) 注

○初懐版 一名巻坊

野百句の欠なきこと云々在氏の初懐版を撰集
 ありと云ふも然るれども昔中力ありて其を
 撰集せしは其の未せしを宝曆十の秋に七十
 五の月この集あき句を撰集の自注ありを
 七十回忌の事なり。園花の事あり。号して園文ら
 撰りたり。宝曆十の年其の再期なり。○
 其後此の八の事。園花の事あり。号して園文ら
 され。元禄の事あり。門人の御母を撰。七部中
 の物あり。号して何れか大徳。撰集と云ふ事
 其を加強て七部の内より又園文ら再刊の
 事あり。○伊達大名の自注なり。○其の事あり。○
 其の事あり。○伊達大名の自注なり。○其の事あり。○
 其の事あり。○伊達大名の自注なり。○其の事あり。○
 其の事あり。○伊達大名の自注なり。○其の事あり。○
 其の事あり。○伊達大名の自注なり。○其の事あり。○

是又を加て訂正より佐竹氏の尊い去日と
凡備のよしお徳紙の三季末の冬日より七
願り去日ハ八季店の時よりも遅カある
事をもつてなりぬるものなきに拘せら
らしめて是のあももの一境より去代の柳
よりやまをとりよきあそり

日の長さをすらすらぬの歩らる 尺角

池之部の日のむやう二さうおてと茶と出まを
るゆきと影の歩らるを去列の夜云文おし
原まうらるとり辞感多し けり 三加さん田
あつあつと影の歩らるおを影をくすを眺て
夫よりなつハ空ニ相うつ日の長さを ササニ マノツルまを
あつハスルモヤハリ 出井ルハサテモ長年ナ影尤
多し 出まをけり ちやこのんさすうハサハ元
モノヤハリのんさ

● 柳よりまきまき相の實 文り

池之部老人自撰傳に及むとちれわれも菊
時古く成て菊を云流るるを宣寺格
相まきまきて結する実の柄より結するまき相
の實とつて相の木とまきも同るあれども
えおし柄も冬めき用の傳あれと反は慮む
加自出さるはけりてなる件なり 柳ハ石の境
和州ハらまきりの略あるを柳之只相乃木
まき大原の柳の内は柳葉の歩らる。拾とさせ
實は矢後のお好能を度きあつてを撰件に付
すといはる。尚しけり成てし柳揚りて我家の尺
立柳の事なりけりて宣とつては社中より矢印より
陸井より人あるをい柳の件なりと菊の自度
しけりまきまき原まきり。天日の去月秋の菊
柳の實をけりて相の實のすむ木は只極らる
るを原まきりて宣と風と年傳の事なり

□ 高村の柳を今もく挿さして 秋風
 卷の木の末を夢野とよめて眺む風情は金更
 二松の用をたたり高村の柳を今もく挿さして
 高村の名画柳を今もく挿さして
 自挿さし出する竹は 柳を今もく挿さして川流の素艶
 中のおくある家の木の葉を今もく挿さして
 世中の素艶を今もく挿さして神を今もく挿さして
 高村の素艶を今もく挿さして柳を今もく挿さして
 の定は今もく挿さして高村の素艶を今もく挿さして
 高村の素艶を今もく挿さして高村の素艶を今もく挿さして
 高村の素艶を今もく挿さして高村の素艶を今もく挿さして
 高村の素艶を今もく挿さして高村の素艶を今もく挿さして

■ 海屋乃 懐了人あひの月 コ舟
 高村の柳を今もく挿さして高村の素艶を今もく挿さして
 高村の素艶を今もく挿さして高村の素艶を今もく挿さして
 高村の素艶を今もく挿さして高村の素艶を今もく挿さして
 高村の素艶を今もく挿さして高村の素艶を今もく挿さして
 高村の素艶を今もく挿さして高村の素艶を今もく挿さして
 高村の素艶を今もく挿さして高村の素艶を今もく挿さして

高村の柳を今もく挿さして高村の素艶を今もく挿さして
 高村の素艶を今もく挿さして高村の素艶を今もく挿さして
 高村の素艶を今もく挿さして高村の素艶を今もく挿さして
 高村の素艶を今もく挿さして高村の素艶を今もく挿さして
 高村の素艶を今もく挿さして高村の素艶を今もく挿さして
 高村の素艶を今もく挿さして高村の素艶を今もく挿さして
 高村の素艶を今もく挿さして高村の素艶を今もく挿さして

■ 秋の山まきの鳥乃 高村の素艶を今もく挿さして
 高村の素艶を今もく挿さして高村の素艶を今もく挿さして
 高村の素艶を今もく挿さして高村の素艶を今もく挿さして
 高村の素艶を今もく挿さして高村の素艶を今もく挿さして
 高村の素艶を今もく挿さして高村の素艶を今もく挿さして
 高村の素艶を今もく挿さして高村の素艶を今もく挿さして
 高村の素艶を今もく挿さして高村の素艶を今もく挿さして

○ 山原の素艶を今もく挿さして高村の素艶を今もく挿さして
 高村の素艶を今もく挿さして高村の素艶を今もく挿さして
 高村の素艶を今もく挿さして高村の素艶を今もく挿さして
 高村の素艶を今もく挿さして高村の素艶を今もく挿さして
 高村の素艶を今もく挿さして高村の素艶を今もく挿さして
 高村の素艶を今もく挿さして高村の素艶を今もく挿さして
 高村の素艶を今もく挿さして高村の素艶を今もく挿さして

胸のきを指山形に炭を拵徳との半さす指
を付たり時 候山形ものきをアツハふれと云
用の人を付たり候 爰に山形す。人よあつた
又云「種柄をさる上平の人」セハうむと知を
みるお人の姿をむき、顔のむきをわねる葉
むは次のたより外に作らるべきなり

● 世この妻木のころむく孫 仙化
箱蓋も初をさるはあつ山形竹上又山よりる
冬畑のりきまたりなり 一尺眺お母一爰に
拵る人を五羽作上意立「路邊」世よあつた
着きたし、お母の拵のお格を拵り

我のり約するお妻候世よ 李下
妻あつたをさるつきまの妻佃又るは約のり
よむく又あつた上意立「面」と又妻す拵を付
より我のり約上、面候世よハ今とまき
又ハ一妻佃のりむむは候世よと先ゆく

るも合相しなり 我もさるを候世よとつ拵
之より下も合なり ○「本」もつ拵なり

■ おもてさるを拵むたあれ也 奉白
奉るお母もさる 我のり約する候世よと奉る相
又さる候世よとつ拵るを拵る人い奉る

召はさる上意立「面」を拵むたあつた
又てさる候世よとつ拵るを拵る人い奉る
上日知とさるのり約なり 芳社因天の
直代水もさる上意立「面」を拵むたあつた

拵むたあつた候世よとつ拵るを拵る人い奉る
と佃居り上拵るを拵る ○大花故子こつ拵る
あつた直とさるを拵る人い奉るの自注と
つひま奉徳之文のさるを拵る人い奉る

上もさる候世よとつ拵るを拵る人い奉る
奉る候世よとつ拵るを拵る人い奉る
れ花候上意立「面」を拵むたあつた

今も世にてもある者もたゞの一人は世の
はたかたしく世にたゞの一人は世の
かたきよき世にたゞの一人は世の

■ 乃のしき事打ふ者もたゞの一人は世の
今も世にてもある者もたゞの一人は世の
はたかたしく世にたゞの一人は世の
かたきよき世にたゞの一人は世の

字法は初毎段之(三)をて又若し移て府
とては(三)をの拍子よとてきうは(三)移て

□ 今世のまをを女の人をきめ

▲ 乃の我見は(三)をの拍子よとてきうは(三)移て
今も世にてもある者もたゞの一人は世の
はたかたしく世にたゞの一人は世の
かたきよき世にたゞの一人は世の

■ 乃のしき事打ふ者もたゞの一人は世の

今も世にてもある者もたゞの一人は世の
はたかたしく世にたゞの一人は世の
かたきよき世にたゞの一人は世の

□ 後すしむす 石ころりく 角

余ある先妻三情れ一乃の権のちる波よ
房しう侍とえ立更坊の用をたう後すしむす
おくよ古き得はて権極よあすよつけ碇う
つよはけ更むのたうなこよおやあふむと
随う相尋らうは妻の沢あさる人の園後
房の妻之情せれとらそお母あめ味あつ碇
あくとあさるそそふ力のおもする給あしう

■ 山保く乳そのむ得乃声也ー 社

余ある後すしむすヨリ得あつてけり侍とえ立更坊
の親おをたうりコハそる受置て死にけり
くる人々更四イ乳あれ山保く乳笑よりて更
宿の宿ま代すおろく乳をきき子得の声を
すア我乳あつてけり人もあつて子もあつて香
せむおととらる相本情あつてあつてー△
けらるは妻のちうく変化をあしう

■ 倉を甲斐の笹とも又よ 相

余ある山保くはす両山のちる様声の忠さきく侍
とえ立更川の親おをたうり倉をかしめ笹とも
又よよ甲斐都留那様橋小様橋四の桂川の美
家をとす後すの倉をのりさそえてア後親
あつて声いすやあつて妻子あつてやそ侍
死あつて女子やあつて侍士あつて風情とあ
い山も様も内うあつてあつて更立さあつて

■ 法の土我利髪を埋るむ 杉

余ある速き杖ニ毎帯子情あつてあつての杖も又よ
去云の洞とえ立更人のおをたうり法の土我利
髪を埋るむは十八歳髪を其ちう物と髪を
ちるむいりつあつて死すともんあつてむと
おまの洞及する給と山保く人命不停速於
山水んを山川の流る水のあまけりせむるあ
あつてはんあつて巻あつてはん志古たあつてあ

花よき花を説きよき花を説き(園)花を説き

● 花うし乃花を用る草の戸
余の我字自利の誓を庵の記念に控る信よ
直花の花をたより花うしの花を用る草の戸
上世に交れぬ花のあり我信信りく庵よ
い再人も信せどとお供て心ゆく分る花も
彼直好愛も信せど花を庵とて花をうし花よ
花よあし(園)花うし池に花うし

□ さく日よりな昇る花の陰
余の世事人へ花うしの花上を世に花を用る草
の戸は白と足き友人をささる花をたよりさく日
よりな昇る花の陰(園)花うし池に花うし
花を花のちよ入て西行をか花うし花うし花
西行と信し念ひりるは花のえ花うし花
花のはい花うし花うし花の友も来り花
て花うし花を花うし花うし花の友も来り花

とむらむと想つて人のまゝのこそあはれ花の香
りよなる上花うし花を花うし花うし花
りよなる上花うし花を花うし花うし花
とむらむと想つて人のまゝのこそあはれ花の香
りよなる上花うし花を花うし花うし花
とむらむと想つて人のまゝのこそあはれ花の香
りよなる上花うし花を花うし花うし花

● 花うし花うし花うし花うし花うし花

▲ 花うし花うし花うし花うし花うし花
花うし花うし花うし花うし花うし花
花うし花うし花うし花うし花うし花
花うし花うし花うし花うし花うし花

○ 花うし花うし花うし花うし花うし花

▲ 花うし花うし花うし花うし花うし花
花うし花うし花うし花うし花うし花
花うし花うし花うし花うし花うし花
花うし花うし花うし花うし花うし花

十九山三子昂山田之子ハソレ守ル人形ノ事
 吉野に傳そやどハる者ハ傳そやのひと云く
 申者より云テトの通りト云ハルハ一
 崩差ト云々ト云ル者ハ傳そやの田舎云々ト云
 振する事ハ云々ト云ハルハ傳そやの田舎云々ト云
 後て伝水ト伝名遠の中を伝水ト云ハルハ傳そや
 去安の身ハ傳都ハ吉野文の傳後を傳け
 伝水田水と云定武の傳水と云ハルハ傳そや
 ありト云ハルハ傳そやの傳水と云ハルハ傳そや
 洲傳ハレト云ハルハ傳そやの傳水と云ハルハ傳そや
 の伝そやと云ハルハ傳そやの傳水と云ハルハ傳そや
 傳そやの死尸と云ハルハ傳そやの傳水と云ハルハ傳そや
 ト云ハルハ傳そやの傳水と云ハルハ傳そやの傳水と云ハルハ傳そや
 カレト云ハルハ傳そやの傳水と云ハルハ傳そやの傳水と云ハルハ傳そや
 傳そやの傳水と云ハルハ傳そやの傳水と云ハルハ傳そやの傳水と云ハルハ傳そや
 傳そやの傳水と云ハルハ傳そやの傳水と云ハルハ傳そやの傳水と云ハルハ傳そや
 傳そやの傳水と云ハルハ傳そやの傳水と云ハルハ傳そやの傳水と云ハルハ傳そや

● 静に遊て膝をくらく云 白

▲ある者云くそあるもの云くある者の伝そや云
 傳そやの身ハ傳そやの傳水と云ハルハ傳そやの傳水と云ハルハ傳そや
 ト云ハルハ傳そやの傳水と云ハルハ傳そやの傳水と云ハルハ傳そや
 ありト云ハルハ傳そやの傳水と云ハルハ傳そやの傳水と云ハルハ傳そや
 傳そやの傳水と云ハルハ傳そやの傳水と云ハルハ傳そやの傳水と云ハルハ傳そや
 傳そやの傳水と云ハルハ傳そやの傳水と云ハルハ傳そやの傳水と云ハルハ傳そや
 傳そやの傳水と云ハルハ傳そやの傳水と云ハルハ傳そやの傳水と云ハルハ傳そや
 傳そやの傳水と云ハルハ傳そやの傳水と云ハルハ傳そやの傳水と云ハルハ傳そや

□ 伝そやの傳水と云ハルハ傳そやの傳水と云ハルハ傳そや

▲ある者云くそあるもの云くある者の伝そや云
 傳そやの身ハ傳そやの傳水と云ハルハ傳そやの傳水と云ハルハ傳そや
 ト云ハルハ傳そやの傳水と云ハルハ傳そやの傳水と云ハルハ傳そや
 ありト云ハルハ傳そやの傳水と云ハルハ傳そやの傳水と云ハルハ傳そや
 傳そやの傳水と云ハルハ傳そやの傳水と云ハルハ傳そやの傳水と云ハルハ傳そや
 傳そやの傳水と云ハルハ傳そやの傳水と云ハルハ傳そやの傳水と云ハルハ傳そや
 傳そやの傳水と云ハルハ傳そやの傳水と云ハルハ傳そやの傳水と云ハルハ傳そや
 傳そやの傳水と云ハルハ傳そやの傳水と云ハルハ傳そやの傳水と云ハルハ傳そや
 傳そやの傳水と云ハルハ傳そやの傳水と云ハルハ傳そやの傳水と云ハルハ傳そや

■ 伝そやの傳水と云ハルハ傳そやの傳水と云ハルハ傳そや

余もあぢちう膝うつる朝思通ル伴ト又志
 園イセお借立寄居の侍とせうしり乃る眉
 を厚ききぬくよあう辛お持大景木のいこ
 ある女上居よそて困るものおあれ女人自意
 作てアハハハを程きしり志とけあく持こり
 ぬりうよ居ちの度で賑われい自留えと奥
 へ投入持おれあえとけい神意あきうして我
 弟よあくぬる旅の侍とて○園冊子お借り
 あらき侍ハハおあちの程きと

■ 墨雲候て哀とてあはれや 扱

余も凡る眉と居守女子又きぬく孫乱れ
 三はたはとて志又補の趣をけり六三の夜に十
 ちうある女の持家と位のおちよと云門のけの袖
 眺わおち了人の直の程きて内よ入るを友人
 として今の女の心の下あひ我あを又表居て
 入のまきぬの持おぬるやけあの程の哀とて

中の病ちやレヤてさうとせうとあすうんあ
 上居き用方ともの園けい哀あのおそ上の方
 度とて持くはああを桂おのれ人あおあ
 片り○園哀とて持と居りいあをれとれ持と
 写透又持と居りしけい哀あのおはあ
 居きとて持と居りしけい哀あのおはあ
 上居るは氏持の侍とて

□ 哀とてあはれや 扱

余もけい候て哀とてあはれやと
 又志とて持と居りしけい哀あのおはあ
 入と持と居りしけい哀あのおはあ
 又てとて持と居りしけい哀あのおはあ
 袖と持と居りしけい哀あのおはあ
 ある人々と又持と居りしけい哀あのおはあ
 園と持と居りしけい哀あのおはあ
 志とて持と居りしけい哀あのおはあ

ハツ
□ ぢれして下はのをぐる 狐四氏 角
▲ 葉白矢袋弁切入て理におする件と之は又
用を打たり ぢれして下はのを^{ワジ}流 狐四氏上條
竹切て着の返し 農をさきてからあこしき
るでせう ぢらるるわりのしヤ 袖拂一ツは面する
のちとよと拾へん今ハ ぢれし竹を括付 又事
袖拂をきく約おん 狐をさしむし 浦さぬ
一とつく ぢれし竹もひてられぬうち け
みと捕まへる ○ 困下ます人下様なり

■ 葉月おる乃くもる 今年 〇
▲ 葉白狐農を^{ワジ}流 今冬共の葉お付と之は又
柿の扱をせたり われ月おの星今ハ 元
る今ハ考きしく冷や地中ハ 葉のあらは
之より中やわく 葉をさしあがる 狐の表は
あくさす 葉ハ 只外を果すしむし 七も拾へ
困今ハ 葉ハ 今も月おつて 又白くおまひ

狐農とて下はのをぐる

■ 石の戸 通梅まの坊と考定て 白

▲ 葉白 葉月おあきく お向人ハ あれハ 今ハ
てする 件ハ 之は葉をさしめたり 石の戸 梅
らまの坊と考定てハ 口は拾へる 坊の二三手並
山中をれしと 葉をさし門通をえれハ 何れハ 何れ
の坊あるらむ 葉をさしすのら 葉を考あしむハ 水
考のしと 拾はれたる 葉をさし 困下ます人下様
より拾はれしと 葉をさしすのら 形考すよ
り 名不のら あり 〇 困下 借化て下様なり

■ 我三代のカラハ 殺治 下

▲ 葉白 葉月おあきく 葉をさしすのら 葉を考あしむハ 水
ほし件ハ 之は 葉をさしすのら 葉を考あしむハ 水
からよ 葉をさしすのら 葉を考あしむハ 水
三代は 及び 孫考す 名人心ハ 困下 借化て下様なり
今ハ 葉月ハ 日本 根 治 葉をさしすのら 葉を考あしむハ 水

と合て我々行と作らる

□ 永祿の合をくく松の歴 化

▲ある我々の口より言はれはけりやと之を言
き給ふ事なり永祿の合をくく松の歴に致す
と刀のこともお要の合をばあす永祿の
歴又の代りも永祿の合をくく松の歴に
なる合をくく松の歴に松の歴のことも
多きを代りとも言はれぬ松の歴に代り
松の歴に人多く言はれぬ○松の歴に代り
いふ事なり松の歴に代り

■ 永祿の田植のいふ松の歴 松

▲ある永祿の合をくく松の歴に松の歴に
代り又は松の歴に代り松の歴に代り
と松の歴に代り松の歴に代り松の歴に
の田植の歴に代り人の田中から合
とくは松の歴に代り松の歴に代り

松の歴に代り松の歴に代り松の歴に代り
松の歴に代り松の歴に代り松の歴に代り
松の歴に代り松の歴に代り松の歴に代り
松の歴に代り松の歴に代り松の歴に代り
松の歴に代り松の歴に代り松の歴に代り
松の歴に代り松の歴に代り松の歴に代り
松の歴に代り松の歴に代り松の歴に代り
松の歴に代り松の歴に代り松の歴に代り

■ 松の歴に代り松の歴に代り松の歴に代り

▲ある松の歴に代り松の歴に代り松の歴に代り
松の歴に代り松の歴に代り松の歴に代り
松の歴に代り松の歴に代り松の歴に代り
松の歴に代り松の歴に代り松の歴に代り
松の歴に代り松の歴に代り松の歴に代り
松の歴に代り松の歴に代り松の歴に代り
松の歴に代り松の歴に代り松の歴に代り
松の歴に代り松の歴に代り松の歴に代り

□ 松の歴に代り松の歴に代り松の歴に代り

▲ある松の歴に代り松の歴に代り松の歴に代り
松の歴に代り松の歴に代り松の歴に代り
松の歴に代り松の歴に代り松の歴に代り
松の歴に代り松の歴に代り松の歴に代り
松の歴に代り松の歴に代り松の歴に代り
松の歴に代り松の歴に代り松の歴に代り
松の歴に代り松の歴に代り松の歴に代り
松の歴に代り松の歴に代り松の歴に代り

の暮し日々に船中のさうさうはなす所あり
は地い所多しと云をばいほれぬ事なりと又
写しと抄作さるる抄合えりの事合ふむ

□ 心城はまゝ人の船とる事なり

▲ある舟に暮す所スル所ありの備衣あり
は消え直に心城の抄さるる船はまゝ人の船とる
事なりハ原氏書之夕暮り上中ねまゝは船中暮すの

にアあるを船中の事を年の少少と云ふ事なり
ありぬ事青徳て子孫を承る事なりと云
ありぬ事青徳て子孫を承る事なりと云

ありぬ事青徳て子孫を承る事なりと云
ありぬ事青徳て子孫を承る事なりと云
ありぬ事青徳て子孫を承る事なりと云

ありぬ事青徳て子孫を承る事なりと云
ありぬ事青徳て子孫を承る事なりと云
ありぬ事青徳て子孫を承る事なりと云

ありぬ事青徳て子孫を承る事なりと云
ありぬ事青徳て子孫を承る事なりと云
ありぬ事青徳て子孫を承る事なりと云

□ 孫鞠の事一尺より外 扱

▲ある舟に暮す所スル所ありの備衣あり
は消え直に心城の抄さるる船はまゝ人の船とる
事なりハ原氏書之夕暮り上中ねまゝは船中暮すの

ありぬ事青徳て子孫を承る事なりと云
ありぬ事青徳て子孫を承る事なりと云
ありぬ事青徳て子孫を承る事なりと云

ありぬ事青徳て子孫を承る事なりと云
ありぬ事青徳て子孫を承る事なりと云
ありぬ事青徳て子孫を承る事なりと云

ありぬ事青徳て子孫を承る事なりと云
ありぬ事青徳て子孫を承る事なりと云
ありぬ事青徳て子孫を承る事なりと云

昔の思持芳乃の事と今に於ては違ふ事なれど
 更にお空の降立の事と今に於ては降の思持の事
 う事とてとく来りし思持の事とて思持の事
 たる降立の事とて思持の事とて思持の事
 是は勸業といふ事とて思持の事とて思持の事
 ありし事とて思持の事とて思持の事
 存に思持の事とて思持の事とて思持の事
 ○降立の事とて思持の事とて思持の事
 んの降立の事とて思持の事とて思持の事
 のある事とて思持の事とて思持の事
 ■ 友よ小降乃の事とて思持の事
 今も降立の事とて思持の事とて思持の事
 又思持の事とて思持の事とて思持の事
 声トハ思持の事とて思持の事とて思持の事
 之も思持の事とて思持の事とて思持の事
 ろき声とて思持の事とて思持の事

□ 思持の事とて思持の事 都日寺 夜

▲ 思持の事とて思持の事とて思持の事
 件トハ思持の事とて思持の事とて思持の事
 ひありし思持の事とて思持の事とて思持の事
 吹合も思持の事とて思持の事とて思持の事
 思持の事とて思持の事とて思持の事
 本 思持の事とて思持の事

■ 思持の事とて思持の事 乃寺 白

▲ 思持の事とて思持の事とて思持の事
 く思持の事とて思持の事とて思持の事
 の思持の事とて思持の事とて思持の事
 不思持の事とて思持の事とて思持の事
 思持の事とて思持の事とて思持の事

■ 思持の事とて思持の事 乃寺 夜

▲ 思持の事とて思持の事とて思持の事
 思持の事とて思持の事とて思持の事
 思持の事とて思持の事とて思持の事

去七時上河辺の早敷で民をち中の腐る
 乱妨の者も定まらぬ七時乱入門ありて
 九未既提搜出て居るをこくふ所を
 を忠厚の袖を履してよの中提ありて
 のんありとては此より位信の心忍や
 拾ひたり ○本云志上提より因提降のち
 下をてて往東の志上の拾ひは極
 角

去る人信し理不そよおはは者七時上河
 去引下本云志上提より因提降のち
 物の心提提上ハ提提上自あつて
 杜上より物もせては提提上
 七匹引束れり手揃へて内取下されり
 お又七時上河辺にありては提提上
 を又云上と云く提提上ありては提提上
 去りて物上提提上あり

■ 鶴の声夕日を月ありあて

▲去る山提提上ハ提提上自あつて
 提提上をけりり鶴の声夕日を月ありあて
 日の限ありては提提上ありては提提上
 閑き提提上中の提提上ありては提提上
 風提提上本云志上提より因提降のち
 下ありては提提上ありては提提上
 とありては提提上ありては提提上

○本鶴の声上提提上ありては提提上

□ 紅乃胎乃杖をききあり

▲去る家の提提上ハ提提上自あつて
 提提上をけりり紅の胎乃杖をききあり
 提提上ありては提提上ありては提提上
 とありては提提上ありては提提上

■ 松毒の木提提上ありては提提上

▲去る紅の林乃提提上ありては提提上

文飾の業を修りて格書の木のるをよむの意ハ
諸おき杖のおも店をてまきもあす格書の
の木をらそ花は足けちのん工人あらしむはり
うきよの申しと解るる格書○因重史格書
の化あるものよもてはは揮毫也

■ 法れあきし登格書及ととく 扱

▲秀白カリおす屏格書の木のるを花の意ニはマ
ラは初と又立格書の傍を修りて法れあきし登
格書の及ととくハ今書ハ出格下ニあはむし
及初て会意と出をえて修く出来といふおを
情の修りて志ぢやかるおき格書を花をんよ
あたまむ格書の格ハ法きおをてあふん

■ 人数多き格書をわきまき 後水

▲秀白世人ハ法れあきし故ニ号シヤ登格書及とと
とくは白と又立格書をわきまき格書を人数多
き格書をわきまきりよんてわきまきりよん

年上一日の格書を格書格書の格書をよせり
ある人い年えお成の我成くこそ格書をよ
あそ格書の格書をわきまき格書をわきまき
苦甲し格書をわきまき格書をわきまき格書を
とくハ白と又立格書をわきまき格書をわきまき

□ 法れあきし登格書及ととく 扱

▲秀白人人数多格書をわきまき格書をわきまき
及立格書の格書をわきまき格書をわきまき
の格書をわきまき格書をわきまき格書をわきまき
て同じ格書をわきまき格書をわきまき格書をわきまき
の格書をわきまき格書をわきまき格書をわきまき
○法れあきし登格書及ととく 扱

格書の格書をわきまき格書をわきまき格書をわきまき
白格書をわきまき格書をわきまき格書をわきまき
格書をわきまき格書をわきまき格書をわきまき
格書をわきまき格書をわきまき格書をわきまき
格書をわきまき格書をわきまき格書をわきまき

三 げ國の武仙を名ある車よき 角

▲名ありけりし武仙を名ある車よき 角
 洞上國に又此洞中の形勢をたたりけし武仙
 を名ある車よきとせしむるに世に名なき日本
 の豪傑の係較多し名なきの車よきをいひて
 洞中よき並に自ら武勇を好む同氣おぼる
 の傍に空城をたし志拙くすとやとて指し
 ○因川上豪傑は毒のたれ日本を勇力に十
 六名の強きて終入駒をえ殊外を洞て
 一刀よきぬる豪傑は勇を教し今より後日
 本武皇太子と名なきとて去りて死する侍
 志又洞よ昔今とてとて威位をむけし武
 日本武といふ強洞は只後つゆの勢を先豪傑
 洞も果す又は毒のたれ皇太子の勇をたて
 車よきたれし毒母の姿をたれし又除
 終に号し名なきの車よき付ありや

■ 名あり及する 聖井の水 亦

▲名ありけりし武仙 日本武皇太子の係を名車よ
 する侍とて是は勇をたたり名あり及する聖井
 の水よ彼等豪傑征伐の時伊吹の林よ大
 蛇の毒よ毒のたれは是をたれを侵しぬる
 清水を聖井とすありけし名を写す
 如灰の名水より聖井の清水よとて
 及する名ありて車よの精神をたれし
 ■ 玉川やおのく六門の妻よ

▲名ありけりし武仙 日本武皇太子の係を名車よ
 する侍とて是は勇をたたり名あり及する聖井
 の水よ彼等豪傑征伐の時伊吹の林よ大
 蛇の毒よ毒のたれは是をたれを侵しぬる
 清水を聖井とすありけし名を写す
 如灰の名水より聖井の清水よとて
 及する名ありて車よの精神をたれし
 ■ 玉川やおのく六門の妻よ
 ▲名ありけりし武仙 日本武皇太子の係を名車よ
 する侍とて是は勇をたたり名あり及する聖井
 の水よ彼等豪傑征伐の時伊吹の林よ大
 蛇の毒よ毒のたれは是をたれを侵しぬる
 清水を聖井とすありけし名を写す
 如灰の名水より聖井の清水よとて
 及する名ありて車よの精神をたれし
 ■ 玉川やおのく六門の妻よ
 ▲名ありけりし武仙 日本武皇太子の係を名車よ
 する侍とて是は勇をたたり名あり及する聖井
 の水よ彼等豪傑征伐の時伊吹の林よ大
 蛇の毒よ毒のたれは是をたれを侵しぬる
 清水を聖井とすありけし名を写す
 如灰の名水より聖井の清水よとて
 及する名ありて車よの精神をたれし
 ■ 玉川やおのく六門の妻よ
 ▲名ありけりし武仙 日本武皇太子の係を名車よ
 する侍とて是は勇をたたり名あり及する聖井
 の水よ彼等豪傑征伐の時伊吹の林よ大
 蛇の毒よ毒のたれは是をたれを侵しぬる
 清水を聖井とすありけし名を写す
 如灰の名水より聖井の清水よとて
 及する名ありて車よの精神をたれし
 ■ 玉川やおのく六門の妻よ
 ▲名ありけりし武仙 日本武皇太子の係を名車よ
 する侍とて是は勇をたたり名あり及する聖井
 の水よ彼等豪傑征伐の時伊吹の林よ大
 蛇の毒よ毒のたれは是をたれを侵しぬる
 清水を聖井とすありけし名を写す
 如灰の名水より聖井の清水よとて
 及する名ありて車よの精神をたれし
 ■ 玉川やおのく六門の妻よ

ける言わぬ人すき若きう醒井を遊るる言守
 波や水^①を生を果と積するがま生てれたる中
 を知るる我を言ひ放んそや利休玉川の化
 教信教いとう言ひと徳義人の流る指し
 △ころ下ススモフは初を合さるや字さ
 声ユヤリまゐる勢おそをう〇^②評記そこ家
 の水あくとむ風流人さねたの山を回す
 又くくはくころ下流を及んぬる

□ 湖くくす年暮ユルリ 化

▲ある玉川や各六のふと階留せし初と又五層
 水中傍をたうに湖くくす年暮 瑞翁ト六のふ
 川の流きく上流を流るを思出さるしけい
 出世の望もをて偏集セしとや危あれてそ
 只一心を身するのこし迷懐する指し

■ 知の春の落穂も又由る系 重

▲ある金古モテに湖くくすトモ又年暮ユルリ

此初と又五層の雲まきなり和のむの落穂
 とも又由る系よりんらのむの世や長き帯に
 湖する度くよ思たすおひ只米の年暮のこか
 るをさるんもて危し候乱るる白妙のむを又
 まい落穂米の指し思うるい言ひは怪の懸
 うやと後教の身を秀るすらんきうき和
 為し因備母子後教の屋おのむの落白髪
 とも又由る系然らば根をまよりよりり」字

○^③ 愚ふもト後^④ 困^⑤ よあるハト後^⑥

□ 竹うこくせい登斤よ教 楊

▲ある彼か肩六和のむの落穂も又由るハハ
 初と又五層初又おきなり竹あを登斤よる
 上竹屋の流しおし村春の極のお花は行る
 を又てきおまぬおむる移し又由るむとく指し

● 南むく葛家の畑の言はれて 不ト

▲ある千早よある春の皮衣をこれ向斤よ

おる件上之迄考のり日南畑をけり△
は白井の導い書れと考の所より印寄り行る
字の字別ておぬと見え立○稚子の扱後
ある門田吉トモ八郎守付り行より止る所も
又勝つ給う深き事有り情も亦可なりむ

○ 秋と其念さるる多のはれく
▲ 案の南むく昔ある畑の裏にで鳴しは初と見え
其家より用をたたり秋と其念おるの徳悲人
老屋めい徳悲人より大いおるる扱れ
まこととけりさ初て鳴しぬとて鳴し扱

■ 隆作の橋の度おをお合 扱
▲ 案の秋と其念さるる月日付り立の徳悲人
と見え母の池をさたり隆作のあはの度とを
お合より考さるる末さるる子よせると其も
末さる池をあれかを隆扱て意ゆくの徳年
扱とせしむる考の扱 羅漢集 可れ隆と名

の面白く〜い十七字は宛めてかく作るべき

■ 秋の心も 扱
▲ 案の隆作の橋の度おをお合つて隆作の扱と見
直さるる案の秋悲さたり正有る首隆作中島那
を合宮より考ありお日往末に牲取を立行
文て隆人を捕ぬ其人を人形を作り扱扱のセ
庵下を治り神ありは侍上其人を執事と扱
行果てぬ其人よ土隆を扱て扱つて社内を
必治て隆采するこよ土隆を扱隆人扱をつく
扱扱て扱て只あるを考すまより隆人扱
治る是隆人扱扱かるといふべき隆人よ畜
り秋の心もよ隆人捕ぬい何玉の人をい
あるべき月よあるべきと見えあはるべきを
考し隆人扱扱古代よの扱と見え其考よ
えといふべき隆人扱扱と見え隆人の隆
作人の名も扱扱て秋の心へ想と見え

○**鹿** 鹿をト狩るは其のト狩るは其のト
字遣ひ人を獲て賣買すもや又賣買ハ
次の白い何そつくそ

■ 鹿の考をおもぬ子もすつめ 弦

▲ある畜字柱上候を後居て配分する然と言田
おく件ト又之を鹿の鹿の鹿をけり鹿の考
をおもぬ子もすつめト候て教されお
むと教ぬる鹿の教ぬる言を伝へる子
の考を教ぬる鹿の考を伝へる天地に通するお
うと又合て候ぬ鹿△人を鹿とすト候鹿
ト□係行トす○**困** 子ト人ト候トす

■ 傷き男乃、箭すむ 月 ト

▲ある鹿の考をおもぬ鹿の鹿をけり鹿の考
と又此物人の考の候を伝へる傷き男の箭すむ
月ト人鹿打ぬて草取候る夫の考をおもぬ
ト今山ト男鹿の考をけりトハ草取を射くらむ

かる事されおと鹿の鹿もす人子
唾を教ぬる報も報す候か我支候や乃
赤男と子を抱て打ぬる候

□ 鹿の考を教ぬる候

▲ある鹿とト鹿と傷き男の箭すむ月ト人
白と又鹿の鹿をけり鹿の考を教ぬる候
ぬる候ト人鹿名ト人鹿の候は射ぬ候
おく管なり候を度すト人この男を碎とては
人射ぬるを突やれと人射ぬるを度すト
むすあく候ト人射ぬしあつと人射ぬし
○らむハあト改ておほし

□ 生約河内の冬乃川面 楊

▲ある生約河の冬乃川面ト人鹿を射ぬ候
七りきとる舟ト又鹿の鹿の鹿をけり
生約河内の冬乃川面ト人鹿を射ぬ候
舟の考を射ぬ候をト人鹿を射ぬ候

鹿のひきき夫と昔方するは昔き度世川
ふと懐ふる指く合ふのありや也んよえ
之より生約内下大和生約山の西林下何
内玉内郡水鏡の為村柿より安治川と七
り川毎通ふ恩地川に流るる字郡恩地
より流るる古大和川と集めて流るる出たり
あひ居の下を袖せぬす海あるを枚字目と
枚字の上を枚字とぬす海よりなり

■ 水車采つくきか階きより 角
▲あむ生約内下生約谷より 比羅野田を
經て恩地川と集るる近き谷川より又吉原橋の
指をたよりお采采つくきか階きより上は
あより下へ水車采あるより生約の字ありあ
この家より階きぬきと水車の字のより松原
の市より水車とぬき指く入川采水敷十
五採采えより新敷茶餘安字のよりとまわ

とて大内く医るあり

■ 梅乃生蓮の院この 財 似去

▲あむ水車采つくきか階きより 町家采水り新
ありはもと生蓮の院敷きなり 梅の生蓮の院
の采より人采をぬて市中の階きをぬぬ院より
谷より下坂の字をぬ中より采あり 梅の生蓮院
の采より水車の字のありとあるとて世帯をいとも
かゝる采ありととあるとぬき△は下末老大和梅
野月院の川采梅をぬと生蓮の院の階き梅野
の地あり○園梅の生蓮の院を園下階きなり

□ ききり院の草葉人むすあむや 丹
▲あむ梅の生蓮の仲去は人采院の采は初と見
立文を採るの用をたより野月の草葉人もすき
めりもよへほれ采梅の人ありと草葉を採る
よ一を正月よ末と人す敷くまこと 奏敷七
まぬもろ今比梅足よりと梅よある人よ草

葉いき毛んと斤なき子と指とけやい教も

■ 物まりの年の過ぎる日の新 重

▲あるおちめてきき如月の菫葉を雅人もまよめ
すや。とあむむと格と又直出代に居る娘を
けり。三長く宮仕を娘の縁つくると教文の正し
きると居る下さくす母は此形にの首を括出
只君娘より娘の事とあて下さるれい教又も
快くしてけと大直ちて居るを居るモウ出下
され居るおちゆむと引てあくる年の先刻より
物付促してモウくと娘まのハヤき過ぎる日の教
も頃けい服とて舞するをかちかくして居る
めては菫葉をき坂草やと又居る娘と

■ 物あそめ教の端を織りて 若

▲ある市に染字に居る娘まの年の過ぎる日の教は
初と又直結しに居る娘をけり。只教後の斤
ア之市に居る娘のゆさりとあそむと独居りて

妹の布やうのを編製のそこよあてまて居る
叶もあむむと娘まのハヤき過ぎる日を
葉を下んあむむ葉をきりてさるるまて居る
も成てはあぬまのあむむ葉の細布物拿す何
そゑのあむむとあむむとあむむとあむむと
○屏風 屏の過ぎる結あむむと子編織し向
あむむとあむむと娘まのハヤき

■ 只あむむと子居るの川さー 根

▲ある物あめ教の端をおりてきてあむむ
件と又直結しに居る娘をけり。只
取守菫の川さー入居る男と二人門田の菫の
川折を川さーとあむむとあむむとあむむと
傳ふま居るに居る娘まのハヤき過ぎる日を
あむむとあむむとあむむとあむむとあむむと
あむむとあむむとあむむとあむむとあむむと
あむむとあむむとあむむとあむむとあむむと

□ 菱のたもとをみ伏て観る
 菱の池の菱の刈き一足て思を厭す体よ又
 立又柿の熟を待たず菱の葉を柵伏たたく
 あく上池中の菱の葉を浮て仰みる如くして
 底干き池の乃々きんきや影くらむ影よ
 菱のちまももあやまの屋守と思持て
 州狩くおあしむと菱と名とくははて更
 て其のお宿を教する狼之園 秋夜を去るみ
 伏てみ麻の目も又て声のさききけ
 作を待とう 園 離 沉 懸 也 似 危 而 小 旗
 頭 頸 系 目 後 有 青 毛 脊 青 背 赤 有 卷
 文 而 脇 碧 有 白 條 掬 菱 有 赤 菱 点 版
 傍 蒼 而 腰 白 翅 蒼 史 録 白 毛 羽 甯 脚
 菱 葉 赤 雌 傍 菱 淡 赤 史 菱 頭 係 仄 凡
 又 種 秋 雌 相 似 而 雄 矣 也 失 危 束 後
 危 凶 晨 成 群 高 飛 性 能 食 泥 及 水 州

根 ちる及る流あれも心秋を待とう
 ● 木葉大少ゆる山陰よりしも 下

ある節あく声胸き件よ史少和を流る木
 葉大ゆる山陰よりしも柿の池に影あく影
 山もも木葉大少ゆる山陰よりしも柿の池に
 △口におき流るをかれあ一足い菱の葉をくも
 と柵の柵伏てみ件よ史△たひき舟よの
 菱よト菱えの影を待あしむ

● 囚人をやうて休むお月お
 菱の山陰よりしも木葉大少ゆる柿の池に
 足直待末の人き待とう囚人を柵で休むお
 月およお月よき菱の葉を待あしむ村次後
 人のお殿よめれいた柵の影を待あしむ休
 菱より流る○園おの月ト後より

● 秋きし出守 長う連合 ト
 ある囚人をよし柵で休むお月お

白史五教交々を扱きたう秋さう出す長う
 連入合ハ信衣島ハ人を捕一村長の宅ニその内
 考へするねうう正正書の本にけは屋の秋
 おて捕人のあユさう出らるを勢えて「若の川」
 原を見れば存の草秋の下考「スヤ一備の
 五あるを剛」位。折るれ及分又よとの徒
 あるさうでござおの夜ある武のおあれそ
 と教合を教りて許すね

問一時考と免ユ名をけり 去
 金ある長書の本さう寺徒にお尋ねハ「五事」
 又五事するの由をけり長々と去り寺徒
 之を扱後「る併」後仕のお「免手」出らる
 二は瓶又「傍」る「名」を何と問れ「去」長書
 のお考「と」付れい「と」る「も」さ「る」我「海」む
 付くお「博」むと「去」れ「甘」房「法」し「あ」ちて
 屋の秋「お」考「あ」つ「ひ」て「免」出「問」お「て」又

を為そ志ぬ「手」秋「秋」の「枝」り「た」つ「よ」さる
 白史「ま」て「更」あれ「口」史「徒」よ「書」れ「と」り「ん
 の徒」を「考」へて「信」れ「始」し「問」時「考」と「免」ユ
 を「け」り「我」名「を」と「問」て「け」酒「考」を「あ」さ「し」ユ
 り「よ」実「い」お「初」を「お」考「も」い「つ」む「と」り「考」
 二は「き」サ「子」け「ユ」ユ「尋」れ「ら」うと「感」する「始」し
 △似「去」い「之」古「洞」の「佛」士「正」堂「正」風「の」始「し」初「し」
 徒「弄」り「ハ」不「余」人「あ」ら「古」傍「て」さ「出」す「秋」と
 又「て」独「娘」来「教」を「け」て「徒」の「名」を「推」し「む」を「再
 徒」を「た」る「い」有「力」の「り」さ「る」も「意」あ「ら」再
 用「ら」れ「す」ま「意」の「全」体「徒」も「多」用「あ」る「也」

■ 八ふくむむ 世々世の亮 弦
 ▲あむけ子ハ何上男ト問一付世岸高と免ユ
 名を付ては初と又五男一人を男と扱をけり
 八ふくむむ 世々世の亮ト田舎客各ハ所々
 扱ては免ユ何卒と名けぬ何とヤきむ

と向はれしとせしと云を信してアノ不祥
予人やその人等とてき名を廊を付しお
うあふんなき意中し標の売る指しお世根乃
あふおちやと云ふ指し入室より世の意中其
中よりしと云ふ何きと云ふ

三度と云ふ昔世の橋下りの山に化
集るの鳥群りんあつむ世世の標の売る
出たと云ふ世世の人の行まをり三度と云
ふの橋下りの山よ成ねる方の三度と云
ふおの地を踏て戦ふ只その身も物
さす往よ山を居し利懸し意を懸すも後季
の旅を橋下りよ去るころ標の売るはておく
指し今おの標に准あれは度とて海をさるるを
を橋にさるる舟の海に深にさし出よりコハ
南北の戦正量二二世世及後世の皇君
を隔し矢和五二所進所養を世を境文和五

は折年名教て雲名せの内裡を後あのみを
名やの批人の情と

あや一も其の草花の草
葉の三度と云ふの花はより人を採する内
ト云ふ及人の身の上をさるるといふ其の草の
家よ候むの金花をり如行のときは其
の批人へ標を賣る意中と云ふと云ふと云ふ
る人の身はむ指し今おの三度と云ふ其の標
其の意中と云ふ意中と云ふの標をさるる
よりかまへ一もさすお後もさす

頃標を志ぬ時ら今今
▲おの意中と云ふ意中といふ其の草の草花は
又と云ふ世の標をさるる頃標を志ぬまの
り云ふ一六因標集お揚洲家のお母遊湖中
約云敬奉人よ思れて一も標をさるる
いあるるの付らむ又標を志ぬは

再お女の振とをまき守成時中納言屋の内
の人西玉よりおく海舟の室よ忘るお
暫切て一その身を依ておく船の舟を
おし尾結て念仏三時で終るなり

● 種もくおく声の災ー 重

まお向時よりおのりて今より方頭博と又
種もく振とをまき守成時中納言屋の内
いまいおのりの頭博とをまき守成時中納言屋の内
改るる件と又立□まきをまき守成時中納言屋の内
ま法事の席よおぬを極るまき守成時中納言屋の内
大是も種もくおのりの依は悦と

● 竹ゆき争はよおるおりて 重

まお向時よりおのりて今より方頭博と又
種もく振とをまき守成時中納言屋の内
いまいおのりの頭博とをまき守成時中納言屋の内
改るる件と又立□まきをまき守成時中納言屋の内
ま法事の席よおぬを極るまき守成時中納言屋の内
大是も種もくおのりの依は悦と

○ 法也 ちりやありおり手がいと流る

● 梅手ごよき白ありりり 重

まお向時よりおのりて今より方頭博と又
種もく振とをまき守成時中納言屋の内
いまいおのりの頭博とをまき守成時中納言屋の内
改るる件と又立□まきをまき守成時中納言屋の内
ま法事の席よおぬを極るまき守成時中納言屋の内
大是も種もくおのりの依は悦と

○ あまひとるおのりて 化

まお向時よりおのりて今より方頭博と又
種もく振とをまき守成時中納言屋の内
いまいおのりの頭博とをまき守成時中納言屋の内
改るる件と又立□まきをまき守成時中納言屋の内
ま法事の席よおぬを極るまき守成時中納言屋の内
大是も種もくおのりの依は悦と

陸奥に浮すはて△（ハ）申上致初

■ 胡子と呼ぶく唐玉の児

▲（オ）白伝長の信れり代や成威は海三すありひは
と又まは信長ひんきのひまはるゝ胡子と呼ぶ
かゝ玉の児は天正元年信長お手は信れり
おゝ明の末の神宗帝も同子即位の号
を美暦と改りてて胡子の児を位を犯
すあり已天下を定り屬を濟てぬれむ
彼方より中華と稱し帝と名む人を日
本の威勢を胡といふはぬるゝ神宗の
子信て親の懐に之のと陰生てぬるゝとい
ふはぬるゝとて信長も之の威勢をたぶ
隆慶六年三月穆宗帝不豫召閣臣
高拱張居正等諭曰東宮幼少今使
之郷等協心輔之遂五月帝崩皇太

子即位嫡○（ハ）國胡子ヲ居士ト稱するコハ

古き懐疑はあり胡の子二國ありと胡子の
誤と云てさうらゝ居士と改りて又又唐の
声をす連行れも考す居士と改りて人の懐疑
の傳におゝあむひん声をす遠き怪し
るゝ居士トハ一も分らず居士もすす

■ おゝ杜丹十町の香を分て

▲（オ）ある唐のあはれ山を明皇胡子といひ極美なりあはれ
此とよみ傳と國傳より是を居下の派をさるゝあり
杜丹十町の香を分て、十町の香を分てり杜丹と
は、揚美地をいひはるゝより杜丹を極
遠け天をたゞは美の考地は有る聖理の枝
と云り、玄宗の目を悪て美地と稱らみそら
るゝと云り、あはれも胡子の奇福受のと
子供の娘と云て美地を圍を許りて國色

のまき分を怪れすと張九齡林甫李白ふら
真の之松之屢獨遊娟祿山本營州雜胡
體亮肥腹蠶過捺上掌教於其腹曰
此胡腹中何所有為曰更立除物止
有赤心尔上悅祿山得出入禁中因
請於其妃上與之共堅祿山先
後又上悅祿山生日上及其妃賜衣
服室羞仍慳甚厚後三日召祿山入
禁中其妃以綿繡為大襦袢覆祿山
令宮人以絲與髀之上同後宮嗤笑
向其故左右以其妃伎守祿妃對上
自往觀之喜賜其妃浣兒金浪後
厚賜祿山自是祿山出入宮掖不禁
或手其妃為食或通宵不出頗有醜
声聞於外上亦不疑

聖德明皇時有

獻牡丹者乃楊妃家花蓋其妃勻面
口脂在牛印干花上詔於仙春館栽
來歲花開右指印紅迹帝名為一捻
紅其字可引出者同出之禁中
種牡丹明皇引太真賞戲命李白為
詩三章其二曰名花國色兩相歡
牡丹之困之頭玉之吳久ありて其妃
此あるを決まあり○困千里上後より
■ 中樓む谷よ出る湯ささく 峽
の句玄宗極之牡丹上との香ささくは白
又古詩の歌おをけりてすむるよ出る
温泉ささくハ明皇其妃を愛して奪よ
ち一驪山の温泉十二宮を築けり祿山
のよ移きて帝の逸費を盡れ其の愧は
失て後い宮々あてて宮ささくささく
よむのし昔をささく久秋をまはるるよ

りるは世をさあされいおれで海を侍
人の笑ふ路の道行く

■ 箏及弦をさす寸音は泣く

▲ 面白おちぬ哀よりあきぬは返寄して
侍の初上立立次次の初を待たず 箏弦を
さまたちるはつとんは降ぬ文あの手木
も打持居るつきをいふその風乃返りより
まろれ糸の端と成て箏弦の音も無きあ
と泣くいふよれあふるこけは後い返り仕
あふる侍の指△△否と返寄りもつれ
て又箏弦の扱文あつるは困る指は箏
弦振ある一れと未考

□ 比叟の虎山よと角の淋さよ 揚

▲ 面白計者方ト口キ箏弦をさす寸音は泣くは
白と又立死を吊るる指を待たず 比叟の虎
山よ伯の淋さよハ箏弦の扱文あつるは困る
指は箏弦振ある一れと未考

中興の北彦山ちの伯父坊辻化の由告られ
い無打是男を強執教法を供の侍
の少て常侍假やま打垂てく淋く
あふ指の因比叟のやまは虎山ちといふ事
よてた去の虎山ちよ射せし作片り

□ 千声唱ふる歌音のいん 角

▲ 面白俗家トカハリ比叟の虎山よ伯の淋さよ
は白と又立立夜夜の指を待たず 千声唱ふる歌
音のいんハ洛中洛外の歌音は人の
由縁おて一お留れ本巻の小櫃ある侍教
作の聖歌音のあは千声のいんを唱あつ
よの居り淋しさを起といはは思いと佛と
無打居の指りるをう

■ 舟哉ツ深きあつ川の侍 扱

▲ 面白千声侍彼方け方ハ大勢歌音のいん
を唱ふる侍ト立立石山集を待たず 舟哉ツ

清みづの川傳よ六月廿七日石山寺の三日訪
子膳新大博の人々涼きく舟旅の道連
親善の心なきを祈りて訪る旅

● 尾中より交る松の白松の 峽

ある舟旅の涼みくは松の川傳は舟え
直長柄提よ五六月比三度名の舟をたて
みくさる招をたたり△は舟大旅の舟
舟旅の涼みくは松の川傳の舟え
も頼もゆき舟大よは提は舟え人の思
持て涼みくは松の招と交る△は舟大旅
をたたり涼みくは松の舟え舟え

□ 松の七舟は交る花白く ト

大翁白尾も交る舟をたて△は舟大旅の舟え
舟の涼みくは松の舟え舟え舟え舟え
舟え舟え舟え舟え舟え舟え舟え舟え
舟え舟え舟え舟え舟え舟え舟え舟え
舟え舟え舟え舟え舟え舟え舟え舟え

七舟の月をねさせて我三舟はねむはと
えて一人わびと年て三舟と七舟は二人舟
く招き交る舟

● 連舟をくさるまそくき 白

ある舟旅の七舟は風雅の舟を結ぶ人のむ白
△は舟と交る舟をたたり連舟加るま
そくきよ今舟は客ふえて狭りれは彼蒼
のまきよやむと膝く一をを結ぶ風雅の舟
まきよれと祝をたたり△は舟大旅の舟え
後不ト峽水似ま加る舟をたたり

△右一巻の中一本の写し三巻のこの十七巻
て舟あり中比幽葉葉今葉葉舟冊子一葉
葉まどあり舟をたたり舟をたたり舟をたたり
△は舟大旅の舟え舟え舟え舟え舟え舟え
舟え舟え舟え舟え舟え舟え舟え舟え

初懐紙注終

○	●	□	□	■	■	□	□	■	■	春	五	比	西	三	一	昂一	昂一	初	七	百
		一	一	尺	三	十	三	六	七	昂二	昂一	昂一								
		二	一	五	一	三	五	五	三											
		二	三	一	尺	三	六	七	尺											
		二	八	三	尺	九	二	五	土	九	西	昂三								

追加二卷五十九右

擇えり来て格作。秋

信長の治む世や少ゆむ

舟机券を授けり今信長臣太田牛一輯録

小浪南地を授けり信長記之りて格と記す

密今及美昭云要通ノ事働故ニ上京々々

及ノ去不使之上テ赦免ノ条々 定。

一京中地子銭永代令赦免畢若從云

家寺社方地子銭之内收納有束分

者相計替地以可致涉汰更。一諸役

免除之事。一饗寡孤独者見計扶持

方可令下行之事。一天下一號取者何

道ニモ大切更也但京中諸名人ヲ

内評美有テ可相定更。一儒道之学

心ヲ碎国家ヲ止サト志ヲ勵者或忠孝

烈之者亦大切更。一履下行亦他二異

予可相計又又器之廣狹能尋向可告知之夏。右條々相計可申付者也。元龜四年七月吉日。信長。村井長門守。

〔其六〕累年ノ乱ニヨリ五畝東山東海ノ大路モ
虧橋朽ケレハ天止三正月ハ條岡坂井高野
山口に人ヲ奉行トシ海乃船度三百才在々ノ
大乃三百曲乃八直ニ石ヲ除兩辺松柳ヲ植
同三月禁中御修理已成ケレハ旧記ニ任セ云
家領ヲ返付ケキ由村井民ヲ丹羽尋為ニ被
任付賞主ニ六尺賈ノ手差シ悉本主ニ返玉フ。
同十一月山岡美作赤林治為ニ被任付瀬田橋
石替アリ。同十年光秀孝玉ハ攻
下ル片山岡燒之而防ク〔其七〕同七年九月
宮内々法印山口甚々ニ任付之シ其金三千
兩ヲ以宇治橋ヲ修サセ玉フ。

其外林中々言敬一昇進之固辭一仁志堂
書あり云々云々云々

